

崩 戸 遺 跡

Kueto Site

東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11

2005

宮崎県埋蔵文化財センター

崩 戸 遺 跡

Kueto Site

東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11

2005

宮崎県埋蔵文化財センター



崩戸遺跡全景【東より】



調査区西壁における層序

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道(都農～西都間)建設予定地にかかる埋蔵文化財発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書です。

本書に掲載した崩戸遺跡は、小丸川に面した水陸交通の要所と目されるところであり、調査面積は決して大きなものではありませんが、縄文時代と中世の遺構が検出され、多くの遺物が出土しています。

特に、旧石器時代終末期～縄文時代草創期の遺物や、中世の建物跡・土壙墓などの遺構は、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成17年2月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 宮 園 淳 一

例 言

- 1 本書は、平成14年度に実施した、東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団から委託を受け宮崎県教育委員会が実施した。
- 3 本遺跡は、調査時は「青木遺跡」との呼称であったが、今回の報告に際し遺跡名を「崩戸遺跡」に変更する。文書・記録類では全て「青木遺跡」となっている。
- 4 現地での実測図などの記録は、宮崎県埋蔵文化財センターの吉本正典、丹 俊詞が作成した。
- 5 本書使用の遺物実測図は、吉本が作成したほか整理作業員が補助した。
- 6 本書に使用した遺構・遺物実測図の浄書は、吉本が行った。
- 7 現地での写真は吉本が撮影した。
- 8 空中写真の撮影については、九州航空株式会社に業務委託している。
- 9 本報告書では遺構の略号は使用していないが、図面や遺物の注記には下記の略号を用いている。なお、土坑については墓と特定できるものも含めて通し番号とした。小穴は遺物が出土しているものみに番号を与えた。

SB = 掘立柱建物 SC = 土坑(墓を含む) SE = 溝状遺構 SI = 集石遺構

SH = 小 穴

- 10 本書に使用した遺跡位置図(図1)は、国土地理院発行の1/25,000地形図をもとに、また遺跡周辺地形図(図2)は、日本道路公団宮崎工事事務所提供の1/1,000測量図をもとに作成した。
- 11 本書で用いた標高は海拔高であり、方位は座標北(G. N.)を基本とするが、遺構実測図などの一部に磁北(M. N.)を用いた。
- 12 グリッドは、国土座標第II系を基に設定している。但し、改訂前の旧平角直角座標系II(日本測地形)である。
- 13 土層及び土器の色調表記については農林省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」に準拠した。
- 14 東九州自動車道関連遺跡の発掘調査では、基本的に認められるテフラやローム層、黒色土帯については共通の略称を用いている。ローム層は、上層からML1・ML2・・・、黒色土帯はMB1・MB2・・・とする(詳細については第I章の註3参照)。テフラは下記の通りである。

K-Ah ~ 鬼界アカホヤ Kr-Kb ~ 小林軽石

- 15 本書の執筆・編集は吉本が担当した。

16 章立てに関して

- ①検出遺構・出土遺物を、現在の位置付けに従い、古い時代・時期から配列している。
- ②第II章の第7節と第III章の第5節では、主に中世の検出遺構・出土遺物について掲載しているが、一部近世に下る遺構・遺物も扱っている。

17 掲載した図面に関して

- ①土器・陶磁器は基本的に1：3の縮尺としている。これは実物大の計測図を66.7%に縮小して製図し、それを50%縮小したものである。
- ②石器は大きさに応じて縮小率を変えている。2：3縮小は、実物大の実測図を133%拡大して製図し、50%縮小したものである。銭貨の拓影も同率である。
- ③青磁の釉厚は、厚い部分のみ表現している。

18 観察表に関して

- ①土師器・陶磁器の器種について断定できない場合も多い。特に土師器の杯と皿・小皿は器高がわからなければ判別が難しい。傾きや体部の立ち上がりにより推定を行っている。
- ②口径・底径は、反転し図上復原して求めたものがほとんどである。「残存率」の列を参照されたい。口(・・)とあるものは、口縁部以外の部位で中心を求め、そこから口縁部の径を推定した値である。
- ③残存率は、径の復原を行った部位でのおおよその比率である。

19 現地での発掘調査、遺物整理、報告書執筆に際して、下記の方々の御指導・御協力を受けた。

(敬称略、[]内は平成16年度時点での所属)

小畑 弘己 [熊本大学] 本田 道輝 [鹿児島大学]
泉 拓良 [京都大学] 田崎 博之 [愛媛大学]
柳沢 一男 [宮崎大学] 広瀬 和雄 [国立歴史民俗博物館]
文化庁記念物課

20 本遺跡の出土遺物、その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 遺跡周辺の環境	1
(1) 遺跡の位置	1
(2) 周辺遺跡	2

第II章 発掘調査の記録

第1節 確認調査の概要	4
第2節 発掘調査・整理作業の流れ	4
第3節 層序	4
第4節 旧石器時代終末期～縄文時代草創期の遺物	7
(1) 概要	7
(2) 土器	7
(3) 石器	7
第5節 縄文時代早期の遺構と遺物	7
(1) 概要	7
(2) 集石遺構	7
(3) 土器	12
(4) 石器	12
第6節 縄文時代前期の遺物	14
第7節 中世の遺構と遺物	18
(1) 概要	18
(2) 掘立柱建物	19
(3) 段状遺構	20
(4) 柱穴列	20
(5) 土坑	20
(6) 溝状遺構	27
(7) 石組遺構	28
(8) II c層に伴う礫の集積	30
(9) その他の遺構	30
(10) II c層出土遺物	30
(11) 段状遺構付近出土遺物	30
(12) II a層他出土遺物	30

第Ⅲ章 まとめ

第1節 章のはじめに	36
第2節 旧石器時代終末期～縄文時代草創期に関して	36
(1) 遺物 ～隆起線文土器～	36
(2) 遺物 ～石器	36
(3) 同時性の検討	36
(4) 遺跡 ～製作跡を伴わない「場」～	37
第3節 縄文時代早期に関して	37
(1) 遺物 ～押型文系土器～	37
(2) 遺跡 ～集石遺構の展開～	38
第4節 縄文時代前期に関して	38
(1) 遺物 ～前期の土器～	38
(2) 遺跡 ～滅失した遺物包含層～	38
第5節 中世に関して	38
(1) 遺物 ～土師器供膳具	38
(2) 遺物 ～陶磁器～	38
(3) 遺物 ～銭貨・茶臼～	39
(4) 遺構 ～15世紀後葉の遺構群を中心に～	39
(5) 遺跡 ～集落の性格～	39
図版	43
報告書抄録	57

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯

東九州自動車道の延岡～清武JCT.間は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となった。さらに平成9年12月に建設大臣(当時)から日本道路公団へ施行命令が出され、公団は翌年の2月から事業に着手している。それに伴い、宮崎県教育委員会は、平成10年度に路線上の遺跡分布調査を行い、計79箇所(896,000m²)におよぶ遺跡の存在が推定された。

そこで、工事施工によって影響が出る部分については、工事着手前に発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成11年度から、日本道路公団の委託を受け、宮崎県教育委員会、宮崎県埋蔵文化財センターが行っている。

本遺跡では、平成13年度に確認調査が実施され、縄文時代及び中世の遺物が出土し、柱穴らしき遺構が確認されている。このため、遺構・遺物が分布すると想定される650m²を対象に発掘調査が実施されることとなった。

発掘調査(本調査)は平成14(2002)年5月1日に着手し同年7月26日に終了している。当初の想定通り、縄文時代と中世の遺構・遺物が確認された。

遺物の整理作業は、平成14・15年度に行った。

第2節 調査組織

調査組織は次のとおりである。

調査主体	宮崎県教育委員会 宮崎県埋蔵文化財センター
所長	米良 弘康(平成14～15年度) 宮園 淳一(平成16年度)
副所長	大藪 和博(平成14～16年度)
副所長	岩永 哲夫(平成14～16年度)
主幹兼総務係長	石川 恵史(平成15～16年度)
総務係長	野邊 文博(平成14年度)
調査第一課長	児玉 章則(平成14～15年度)
調査第一課長	高山 富雄(平成16年度)
調査第一係長	谷口 武範(平成14～16年度)

調査第二係長 長津 宗重(平成14～15年度)

主幹兼調査第二係長 同上(平成16年度)

主査(発掘調査・報告書編集担当)

吉本 正典

調査員 丹 俊詞(平成14年度)

第3節 遺跡周辺の環境

(1) 遺跡の位置

崩戸遺跡は宮崎県児湯郡高鍋町大字上江字崩戸に所在する(図1)。位置は北緯32°8'50"、東経131°29'23"付近にあたる。遺跡地の南東～東には青木集落がある。

宮崎県児湯郡高鍋町は、県域のほぼ中央の一角を占める。北は川南町、西は木城町及び西都市、南は新富町に接し、東には日向灘が広がる。

九州山地に源を発する小丸川が、町域内を東に流れており、右岸の低地上に市街地が広がっている。

この一帯は宮崎平野の北部にあたり、河川近くの低地を除き、段丘地形が卓越する。段丘面は高位側から茶臼原面(海拔約120m)、三財原面(約90m)などと名づけられている。町城南西部には三財原面に相当する牛牧原台地が広がっている。

遺跡は小丸川右岸の低位段丘上に立地しており、標高は海拔約18mを測る。河川に向かって張り出した低い台地の様相を呈している。この段丘面は、地質調査の成果によれば、小丸川河岸段丘I面に相当すると考えられ、小林軽石(Kr-Kb)以上の層が堆積する¹⁾。

遺跡地のすぐ南には、牛牧原台地からのびる野首丘陵の端部が迫っており、そこを古道が通っていた。付近は「宿坂」または「宿の坂」と通称されており、百済の亡命王族にまつわる伝承も残っている。丘陵端の崖下では、改良前の県道木城高鍋線の敷設工事(昭和40年代)の際に、石塔群が確認されたと伝えられている。

遺跡地の北は、やはり急崖(比高差12m)をなして下り、小丸川の現河床に至る。

また明治時代の一時期、遺跡地付近には「清水尋常小学校」があった。

(2) 周辺遺跡

本遺跡の周辺では、数箇所では発掘調査が実施されているほか、古墳群や中世城郭跡といった史跡がある。それらのうち、本遺跡と関連の深い時代の対象物を中心に、概要を記す。

遺跡地の南には、前述の通り野首丘陵が迫っており、丘陵端部と東～南側にある斜面・谷部を含めて野首第1遺跡と称されている。野首第1遺跡では、県道木城高鍋線の改良工事と東九州自動車道建設という別の事業に起因する発掘調査が行われている。

県道関連調査箇所では、旧石器時代の遺物や縄文時代早期の散礫・集石遺構・炉穴、古墳時代の竪穴住居跡・横穴式石室を有する円墳(野首1号・2号墳)、中世の掘立柱建物跡、五輪塔・板碑群などが確認されている²⁾。このうち、縄文時代早期の集石遺構・炉穴は、押型文系の田村式及び手向山式期に属するものが主体となる。中世の掘立柱建物は、2×5間の二面底付(SB1)と2×3間(SB2)の2棟が確認された。SB1は柱穴内に柱痕が遺存していた。柱痕の年代測定の結果から15～16世紀に属する建物とされ、その位置から見張り台あるいは番所的な施設と推定されている。また石塔群は、前述の県道工事の際に確認され、のちに移設されたものと目されている。

野首第1遺跡の東九州自動車道関連調査箇所では縄文時代早期の集石遺構、野首1号・2号墳に関連するとみられる2基の竪穴状遺構、近世の屋敷を構成する石垣や土塁、礎石建物、土坑などが検出されている。また谷底の低湿地層からは、中世のものとみられる木製品(柄杓や曲物、扇など)が出土している³⁾。

なお、縄文時代早期の集石遺構や炉穴は、やはり東九州自動車道建設に伴う野首第2遺跡の発掘調査においても多数確認された⁴⁾。集石遺構の中は、検出面からの深さが70cmをこえる土坑を持つものがある。

南東に続く低位の段丘上には、山王古墳群が分布している。前方後円墳3基、円墳9基の計12基の存在が知られている。ただし発掘調査が実施されていないため、詳細は明らかになっていない。

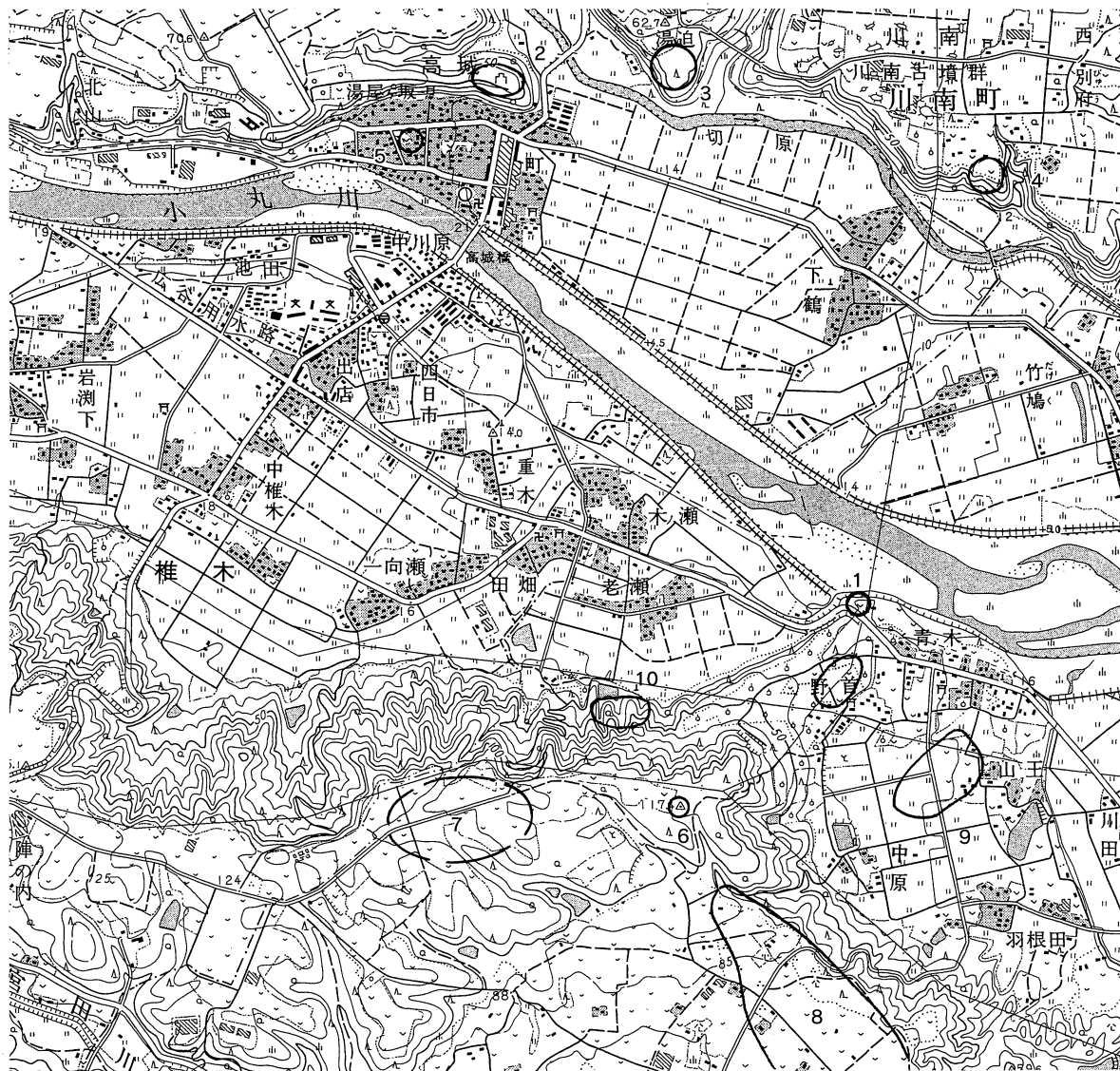
本遺跡より約2km程小丸川を遡ったところ(左岸側)に、戦国期中世城郭として名高い高城跡がある。古道と河川交通の結節点をおさえる位置にあり、古来、重要視されてきた。長祿元(1457)年以降、財部土持氏を駆逐した伊東氏の領有下にあったが、伊東氏没落後は島津氏の家臣が入り、天正6(1578)年の高城・耳川の合戦の際には、大友氏の大軍に包囲されながら耐え、落城しなかったと伝えられている。丘陵端部を幾重もの空堀で画する縄張りである。また、その東方約0.5kmの台地端部には松山壘と称される中世城郭がある⁵⁾。曲輪や規模の大きな空堀が良好な状態で残っている。

牛牧原台地の縁辺部近くにある老瀬坂上第2遺跡では、方形に巡る土塁・空堀の痕跡が現地表面で捉えられており、発掘調査の結果、陣跡らしき遺構であることが確認された。文政3(1820)年に書き写された絵図に描かれている「以久公御陣」であった可能性が指摘されている⁶⁾。

なお、中世からの城郭で、後に近世高鍋藩の藩庁の置かれた高鍋城は、本遺跡の南東約3.2kmのところにある。

註

- 1) 木村克己ほか 1991『5万分の1地質図幅「尾鈴山」及び説明書』地質調査総合センター
- 2) 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『野首第1遺跡』—宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書86—
- 3) 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ』—宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76—
宮崎県埋蔵文化財センター 2004『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ』—宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書91—
- 4) 前掲3に同じ
- 5) 宮崎県教育委員会 1999『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』
- 6) 高鍋町教育委員会 1991『町内遺跡発掘調査報告書 老瀬坂上遺跡・高鍋城跡』—高鍋町文化財報告書6—



0 [1 : 25,000] 2km

- 1 崩戸遺跡 2 高城跡 3 松山壘 4 河原之陣 5 平城 6 老瀬坂上第2遺跡
- 7 天正六年島津総陣 8 牛牧古墳群 9 山王古墳群 10 老瀬横穴墓

図1 遺跡の位置と周辺遺跡

第II章 発掘調査の記録

第1節 確認調査の概要

本調査に先立ち、平成13年度に確認調査を実施した。平成14(2002)年1月16日から1月23日までの期間、調査対象総面積800m²のうち、畑地部分の650m²を対象に、幅2mを基本とするトレンチを3箇所設定して人力による掘り下げを行った。実掘表面積は65m²である。

この確認調査により、表土下に灰褐色を呈する遺物包含層(後述のII a層)があることが判明し、柱穴らしき遺構も検出された。またその下位の暗褐色土層(III層)より黒曜石製の剥片が出土しており、縄文時代の遺物包含層の存在が推定された。

一方、確認調査対象地の東側にあたる宅地部分(150m²)については、畑地部分より一段(約1m程度)低くなっており、遺物包含層や遺構検出面は削平されて残存していないと判断している。

第2節 発掘調査・整理作業の流れ

平成15年5月1日付けで本調査に着手する。諸準備終了後、5月13日より実際の作業を開始。

まず、平行して行われた工事の関係で、調査区南東側部分について、先行して掘り下げを行う。この箇所で中世の土壙墓が検出された(1号土壙墓)。それについては記録・遺物取り上げ終了後、埋め戻され、歩行者用の仮設通路となる。

5月20日より、重機を投入して表土剥ぎを行う。調査区北側より、遺物包含層であるII a層を掘り下げていく。

5月28日より3日間にわたって、調査区外に廃土を運搬する(業務委託)。

6月6日に、国土座標第II系に沿った10mグリッド杭を設置(業務委託)。西からA・B・C杭、北から1・2・3杭として、その組み合わせで杭名を表記すること、さらにグリッド内からみて北西側の杭名を、当該グリッド名にすることと定める。

6月中旬には、II a層の下面(III・IV層ないしは基盤層の直上)で、中世の柱穴や土坑などの遺構が多数検出され、調査区北端部近くでは、段落ち状の

箇所が確認される。

7月初旬より、中世の遺構の実測と並行してIII層の掘り下げを開始する。その結果、集石遺構が5基検出され、押型文系土器などの遺物が出土している。このことからIII層は、K-A h(アカホヤ層)下位のMBOに相当する層であり、縄文時代早期の遺物包含層であることが判明した。またIII層最下部でも少量ながら遺物が出土している。ただし、このIII層は堆積していない箇所もあり、広がりには約400m²に限られた。

また、中世の遺構が濃密に分布する調査区の南西端部では、調査工程上の都合より、遺憾ながら掘り下げを完遂することができなかった。

7月12日に、空中写真撮影を実施。7月18日には全ての作業が終了している。

遺物整理については、現地調査時に水洗をほぼ終えており、平成14年12月から注記・接合を、平成15年2月から5月まで実測作業を行った。

平成16年度には報告書の図面浄書と本文執筆を行った。

第3節 層序

基本層序は下記のとおりである(図3)。なお、本遺跡では広域テフラである鬼界アカホヤ層(K-A h)はみられない。

I・表土・耕作土。縄文土器や石器、陶磁器を含む。

下記のとおり細分可能。

- a. 現代の耕作土。
 - b. 近代期に形成された層か。礫を含む。
 - c. 巨礫を含む。造成土か。
- II・主として中世の遺物包含層。細分可能。
- a. 灰褐色を呈する。調査区のほぼ全面に広がる。
 - b. A-1・2区など部分的にみられる。やや赤味がかっている。
 - c. 黒褐色を基調とするが、各層のブロックや礫が混じりまだら状となる。造成土か。A-2・3区付近のみ認められる。
- III・暗褐色土。ややかたい。東九州自動車道基本層序のMBOに相当する。縄文時代早期の遺物を包含するが調査区全面には広がらない。



図2 遺跡と周辺の地形

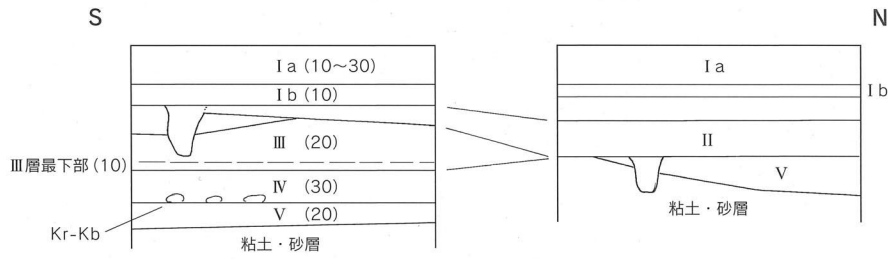
また、この層の最下部(Ⅳ層との層界近く)より遺物が出土している。本文中で「Ⅲ層最下部」と称する層準にあたり、色調などⅢ層とⅣ層の中間の特徴を有する。

Ⅳ・黄色味がかった褐色土。下部ほど黄色味が強く粘質となる。また下部に霧島小林軽石(Kr-Kb)のブロックを含む。

Ⅴ・赤褐色の砂質土。無遺物層。

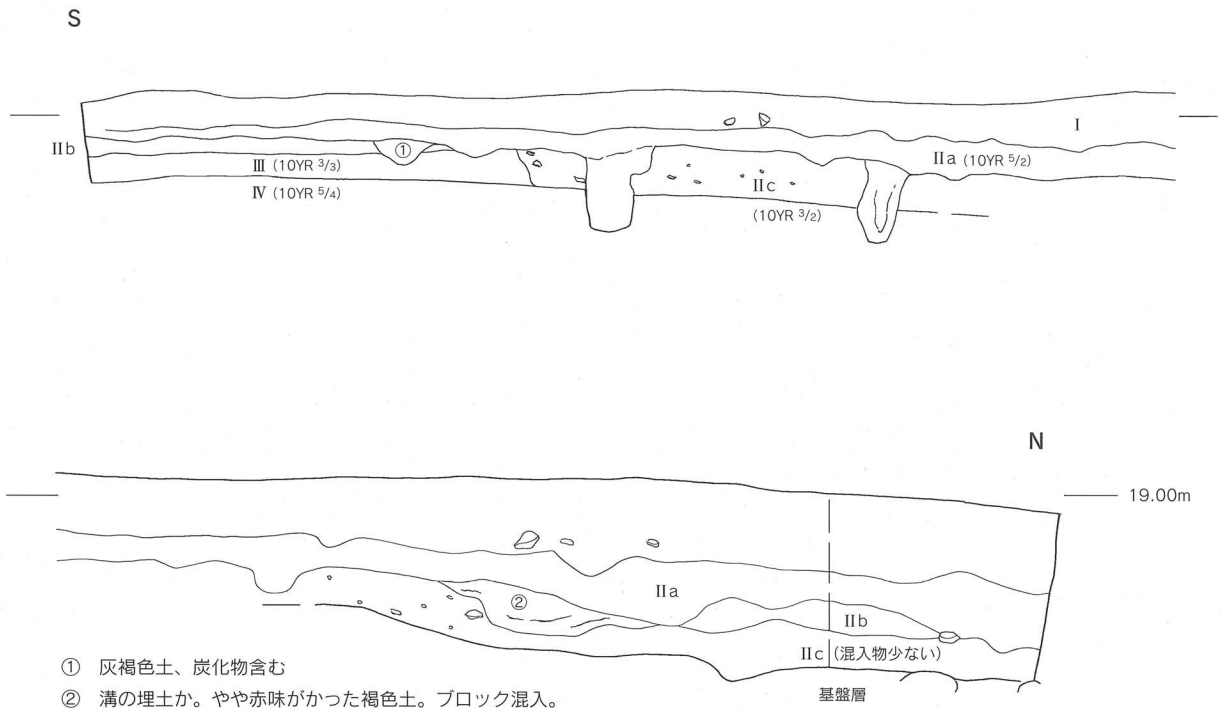
基盤層は黄白色の河成粘質土・砂層。下部ほど礫が多くなる。Ⅳ層およびⅤ層も、調査区全面には広がらない。Ⅱ層直下に基盤層があらわれる箇所もある。

なお、図3の下段には、調査区西壁の層位を示している。



B-3区 確認調査トレンチ西壁での層序(模式図)

※ ()内は平均層厚(単位cm)



- ① 灰褐色土、炭化物含む
- ② 溝の埋土か。やや赤味がかつた褐色土。ブロック混入。

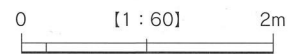


図3 遺跡の層序
(模式図・層位断面図)

挿入図版1 掘削面にみる深層基盤

第4節 旧石器時代終末期 ～縄文時代草創期の遺物

(1) 概要

該期単独の遺物包含層は、発掘調査開始時においては明確に捉えられていなかったが、Ⅲ層最下部で隆起線文土器や細石刃、尖頭器が各1点出土したことから、縄文時代早期より古く遡る時期の遺物包含層の存在が明らかとなった。

さらに、遺物整理の過程で、Ⅱ・Ⅲ層中より数点の隆起線文土器が出土していることが確認された。ただし、Ⅲ層最下部が「文化層」として捉えられ、当該資料が共伴するものかどうか、あるいは時間差を有するののか、といった時間的問題については、にはわかには判断できない。本節ではとりあえず、それらについてひと括りにして掲載する。

(2) 土器

いわゆる隆起線文土器が出土している(図5)。5のみⅢ層最下部より出土。

平面分布状況については、垂直位置がほとんど原位置を止めないことやサンプル数が少ないことから、参考程度にとどめるべきであろうが、確認された全ての個体がB-2区より出土している点は特記すべきで、調査区内では最も標高の高い一帯を中心に分布していることは言及可能であろう。

1は連続しない細めの突帯の下位に、浅い圧痕文(爪によるものか)が付される。2もおそらく同様の特徴を有する個体であろう。ただし、突帯の連続しない部分が意図してのものなのか、剥落の影響なのか判断に苦慮するところもある。1は突帯を器壁面に貼り付ける際に横方向のナデ調整を施さないため、接合箇所が明瞭で、それゆえ剥落が生じやすい。3は口縁部に2条の突帯が巡る。特に外面の器壁剥落が激しく断定はできないが、おそらくは加飾を施さない突帯であろう。4も蛇行する微細な突帯の下方に圧痕文が施される。5と6は口縁部外面に突帯を密に貼り付ける。5には斜め方向に垂れ下がる突帯も付される。口縁部形態は直行するか、やや内湾気味となる。いずれも突帯上から器壁面接合部にかけて、矢羽根状の爪形圧痕文が刻されている。7は低い突帯の両側に爪形文が施される。

なお、内面については全てナデ調整が施され、多くの個体に、指頭による押さえの痕跡が残る。

(3) 石器

8と10はⅢ層最下部より出土した石器である(図6)。この2点の他に、剥片・碎片類は確認されていない。8は黒曜石製の細石刃。縦断面はゆるやかな弧状をなす。側面に使用痕とみられる微細な剥離がある。10は槍先形尖頭器である。全長7.5cm。流紋岩系の石材を用いている。両面に粗めの押圧剥離による調整が施される。基部には自然面が残る。

9はB-2区のⅢ層出土の資料である。細石刃の尾部とも考えられるため、ここに掲載している。

第5節 縄文時代早期の遺構と遺物

(1) 概要

主たる遺物包含層はⅢ層であり、集石遺構が5基検出され、計13点(土器7点、石器・剥片6点)の遺物が出土している。ただし、該期に属すると目される土器が、攪乱の影響によりⅠ・Ⅱ層、あるいは後世の遺構覆土中にも若干量混入していた。

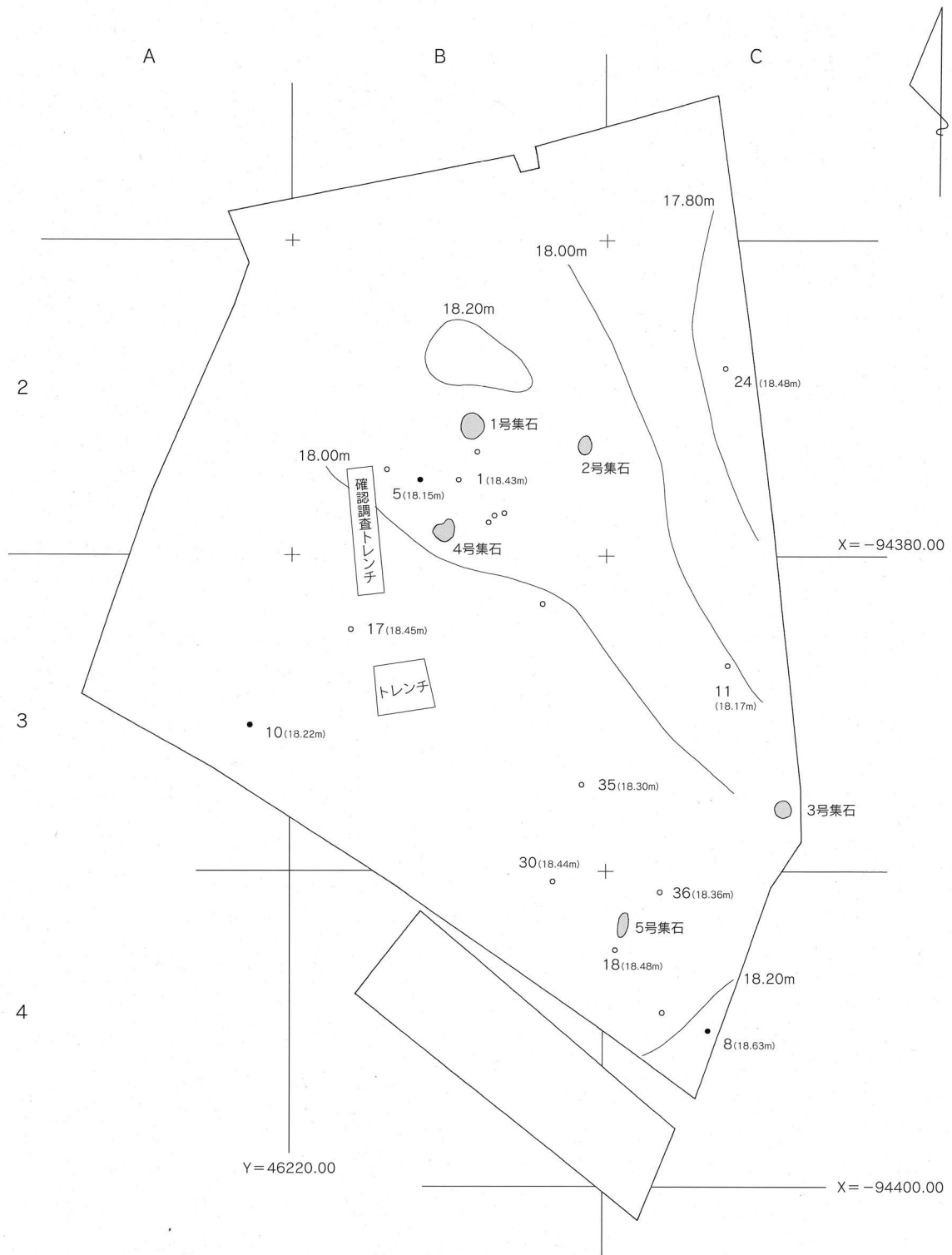
Ⅲ層掘り下げ後の状態で地形を概観してみるならば、B-2区辺りが最も標高が高く、そこから南東方向に尾根状に張り出すこと、その南西側はごく浅い谷状を呈すること、東方向に向けて標高を減じていくことなど、微細な地形のうねりが読み取れる。ちなみに最高位地点～尾根状張り出し部では、Ⅲ層はみられず、Ⅱ層の直下に基盤層があらわれる。

(2) 集石遺構

5基検出された(図7・8)。そのうちの3基は最高位地点近くのB-2区にあり、1基はそこからのびる尾根状張り出し部に構築されている。

集められた礫の下部に土坑を有するもの(1号～3号集石)と土坑の認められないもの(4・5号集石)に大きく二分できる。構成礫は現地での肉眼観察による所見であるが、付近の河原で採取可能な砂岩系の礫が多い。いわゆる尾鈴山酸性岩も一定割合を占めている。

1号集石は、径1.0mの円形の土坑を設け、底面近くに11個の円礫を配する。上面には5～15cm程の大きさの円礫・角礫を集める。



- Ⅲ層出土
- Ⅲ層最下部出土
- ()内は、遺物出土レベル
- ・等高線はⅢ層掘り下げ時のもの。地形のうねりがあるため、遺物のエレベーションは示さなかった。地山面からの高さで上下を判断されたい。

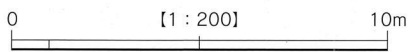


図4 Ⅲ層検出遺構及びⅢ層・Ⅲ層最下部遺物出土位置

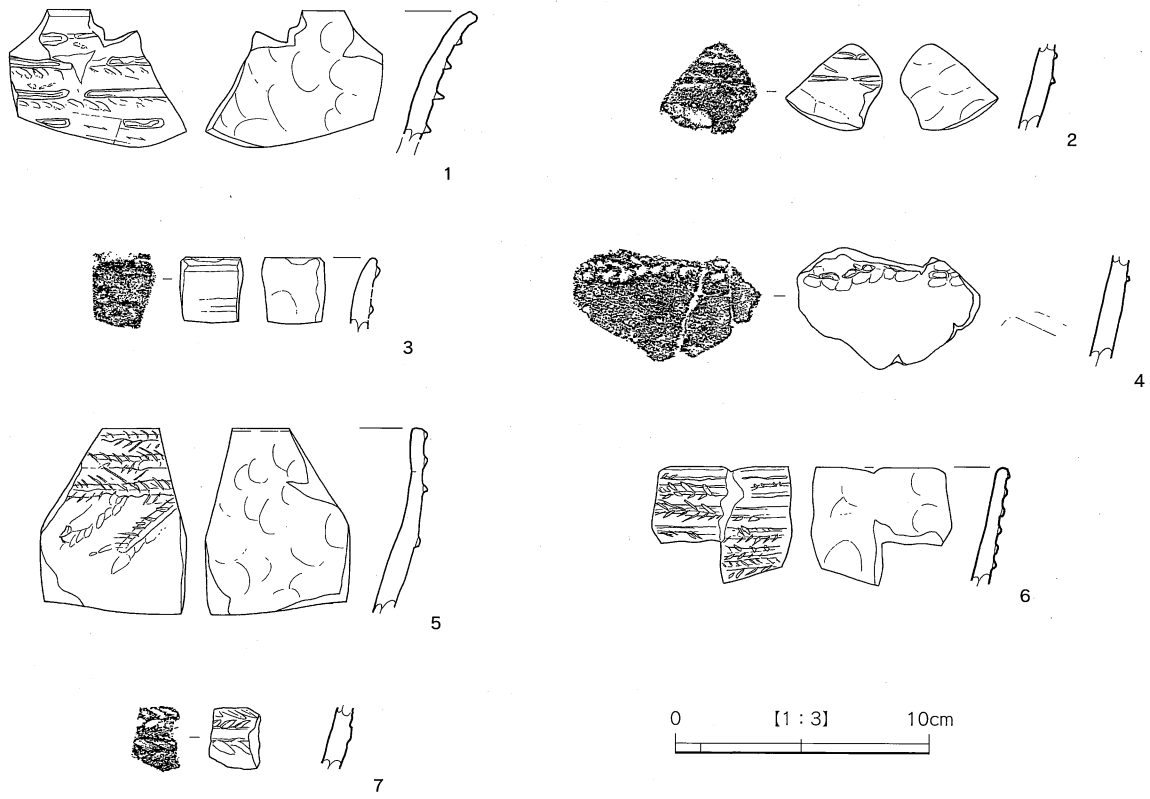


图5 出土土器(1)

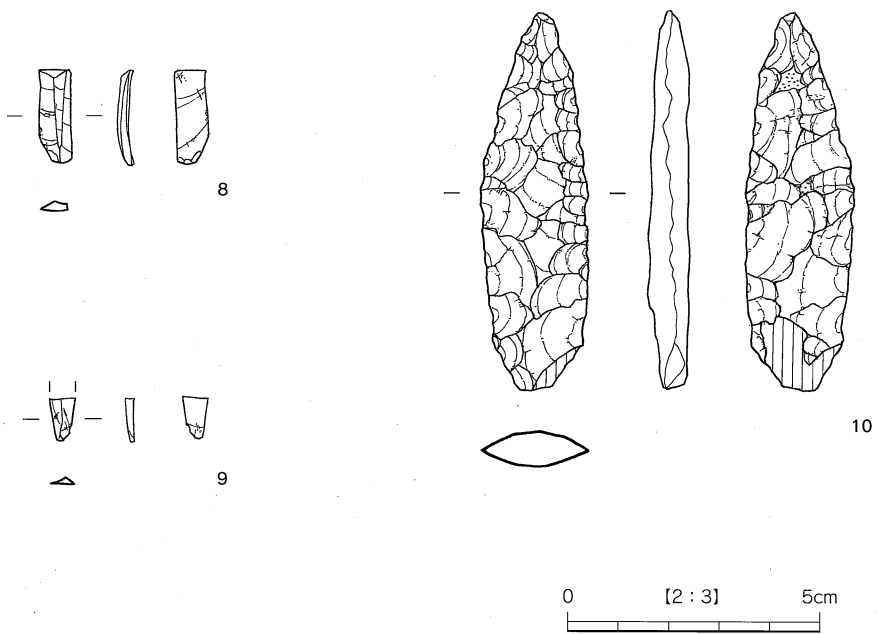


图6 出土土器(1)

表1 遺物観察表(1)

土器

図	番号	出土位置	層	色調(外/内)	調整・文様(外/内)	胎土(混入物等)	備考
5	1	B-2	Ⅲ	にぶい黄橙	ナデ・爪形文/指頭 ナデ	灰白色粒	突帯(連続しない)
	2	B-2	Ⅱa	にぶい褐	ナデ・爪形文/指頭 ナデ	灰白・褐色粒	突帯(連続しない)
	3	B-2	Ⅲ	にぶい橙	ナデ?		剥落著しい
	4	B-2	Ⅱa	にぶい橙/にぶい橙	ナデ・爪形文/指頭	乳白色粒	低い突帯
	5	B-2	Ⅲ下	にぶい黄橙	ナデ・爪形文/指頭 ナデ	黒色粒	垂下突帯, 胎土中に繊維の 混合物?
	6	B-2	Ⅱa	灰褐/にぶい橙	爪形文/指頭ナデ	灰白・褐色粒	突帯
	7	B-2	Ⅱa	にぶい橙	爪形文/ナデ	黒色粒	低い突帯

石器

図	番号	出土位置	層	石 材	計 測 値(cm)	重量(g)	備考
6	8	C-4	Ⅲ下	黒曜石	長1.4/幅0.6/厚0.25	-	
	9	B-2	Ⅱa	チャート	幅0.55/厚0.2	-	
	10	A-3	Ⅲ下	流紋岩	長7.1/幅2.0/厚0.7	2	

底面近くの礫は赤化が認められるが、上面のそれは数個を除き、明らかに赤化していると認定できる個体は多くない。礫間には微量ながら炭化物粒がみられた。特に底面近くの礫の周囲で目立っている。底面・壁面では火熱を受けた影響からか、淡い赤橙色を呈しているところが認められた。

2号集石は、0.6m×0.4mの楕円形を呈する浅い土坑の中に8個の円礫・亜円礫を平面的に並べている。印象としては「敷きつめている」といった感じである。小振りな礫は赤化が著しい。また被熱による影響であろうか、もろくなって割れている礫もあった。

3号集石は、径0.8mの土坑の底面に、2個の扁平礫を配する。底面の礫はいずれも赤化している。その他の22個の礫は、投げ込まれた状況を示すものである。赤化の度合いは高くない。礫間から少量の炭化物が出土している。

4号集石は径約1.0mの範囲内に、円礫・角礫が集積するものである。ただしその範囲内には空閑地があり、集積箇所も層をなして密に集まる状態ではない。明らかに赤化している礫が数個みられる。

5号集石は0.9m×0.4mの楕円形を呈する範囲の中に、28個の円礫を集める。明らかに赤化した礫が数個みられた。

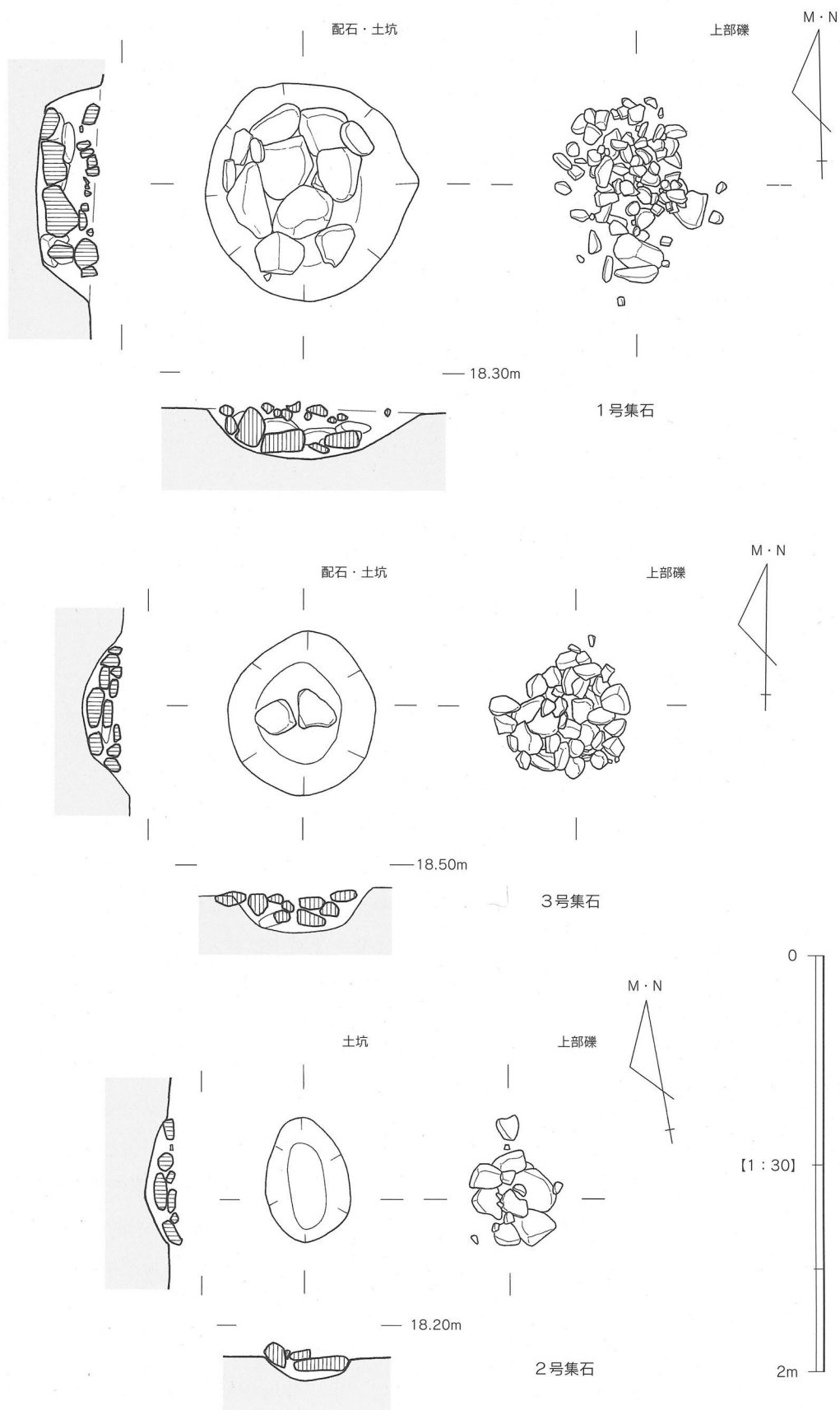


图7 集石遺構(1)

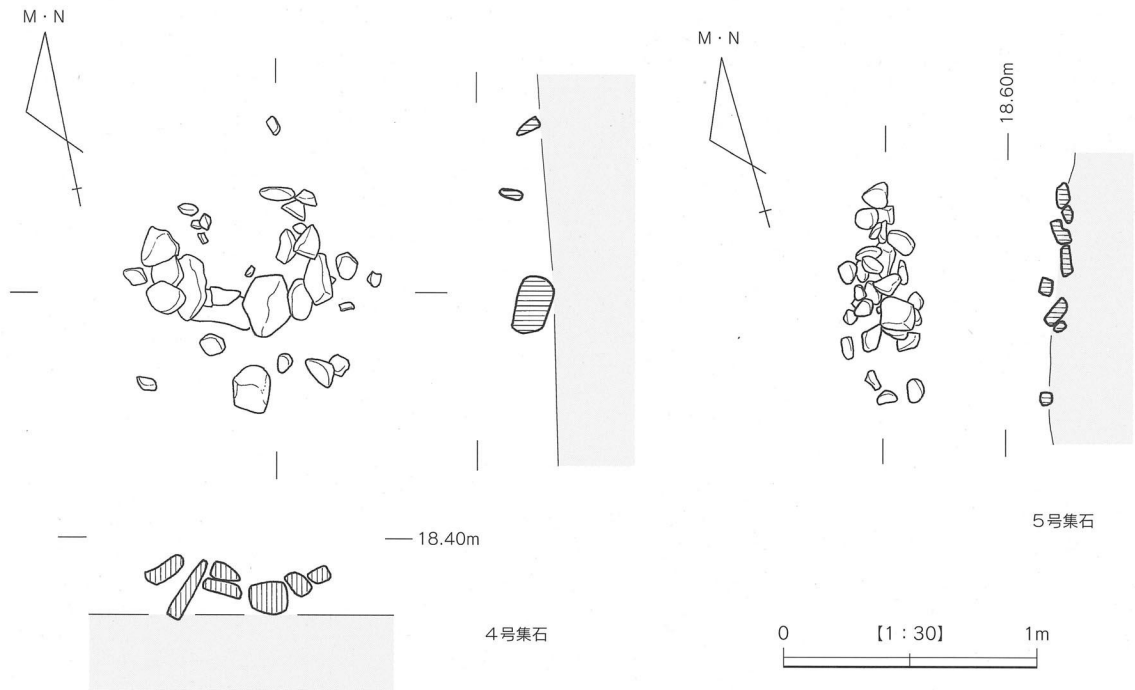


図8 集石遺構(2)

(3) 土器

Ⅲ層上～中位より押型文系土器や無文土器が計7点出土しているほか、Ⅰ層・Ⅱ層、あるいは後世の遺構覆土中より押型文系土器や無文土器が出土している。可能な限り図化を行った(図9)。ただし、器壁が剥落するなど、実測不可能な個体も多くみられた。

なお、平面分布に関しては、草創期の土器ほど明瞭な集中箇所は認められない。

11～13, 15～26は外面に楕円押型文を施す。11や19などは粒の大きな、粗大な文様であり、11は口縁部内面に斜方向の沈線文がみられる。15・18は楕円押型文を縦方向に施文するもので、18は施文原体の長さが約2cmであることが判る。

25は不確定ではあるが、壺形を呈する可能性が指摘できる。28は「イチゴ」の粒状を呈する、おそらく木の枝を原体とする文様を施す。樹皮の繊維痕のような筋が観察できる。29は文様の刻みが浅く、菱目状になるなど後出の要素を備えている。

30・31はⅢ層出土の無文の土器。薄手であることや、胎土中に黒色の鉱物を含むことなど、押型文系土器との違いが大きい。

30はⅢ層中より正立の状態出土している。底面は、わずかに上げ底となる。

(4) 石器

Ⅲ層出土資料は6点のみである。反面、Ⅰ・Ⅱ層より出土した石器類は多く、土器同様、後世の攪乱により、上層中に混入したものと考えられる。しかし土器と違い、それ自身では所属時期の特定が難しい。本節ではⅢ層より出土した石器を中心に掲載する(図10)。

32はⅢ層出土の水晶製の石鏃である。使用によるためか、先端部と片脚が欠損している。33の石鏃はⅡa層出土であるが、小形の正三角形を呈し、基部がわずかに内湾する。そのような形態上の特徴から、相対的に古い段階に属する可能性があるため、ここに掲げている。姫島産黒曜石製。

34はホルンフェルス製の剥片。同種の石材の剥片は、Ⅰ・Ⅱ層中に比較的多く認められる。

35と36はいずれもⅢ層出土の礫使用石器。付近で採取可能な尾鈴山酸性岩や砂岩を用いている。ただし、磨石様の35、石皿・台石様の36ともに、使用の頻度が高くないためか、擦過痕・研磨痕ともさほど明瞭でない。

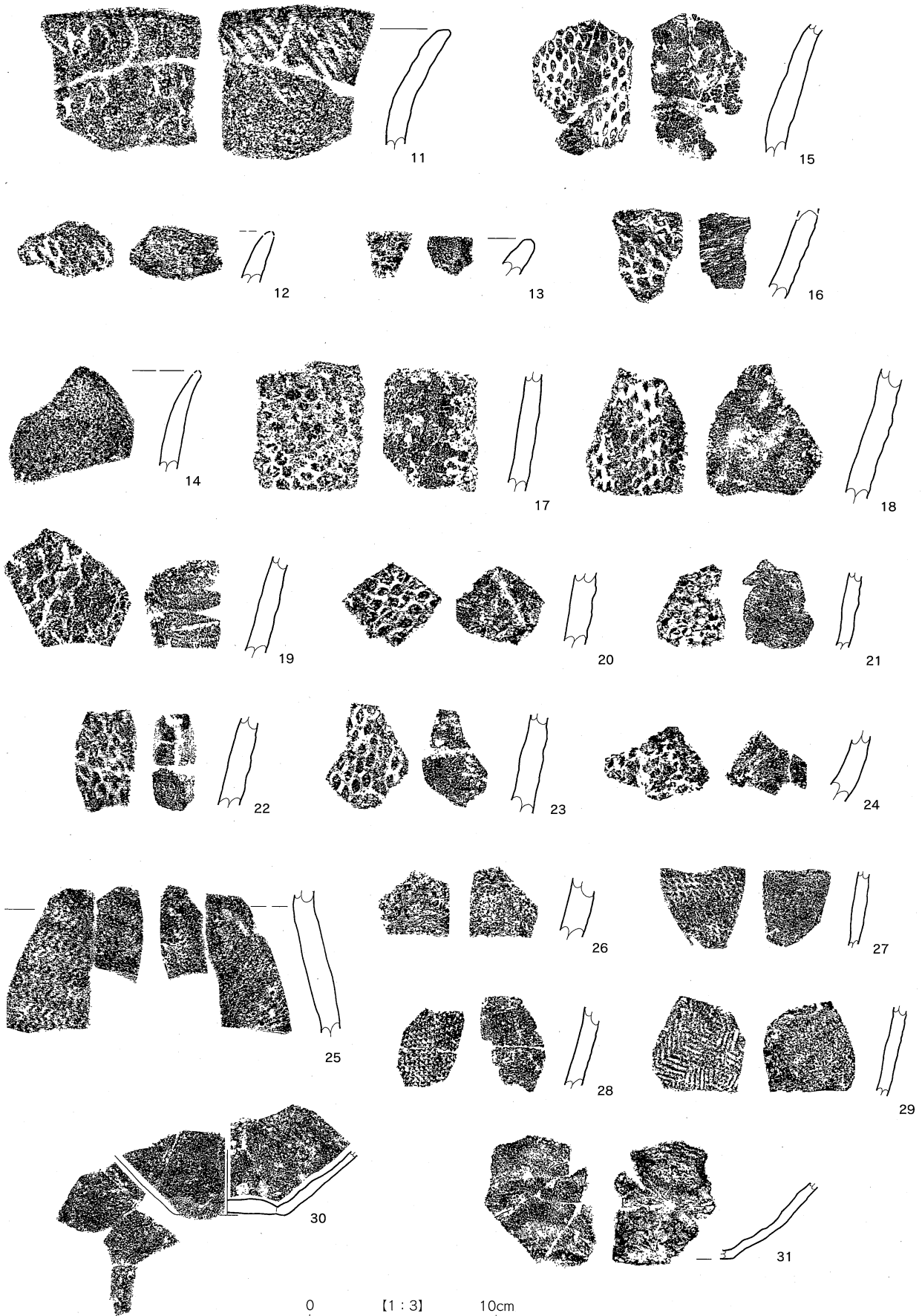
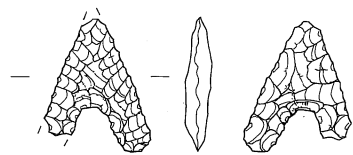


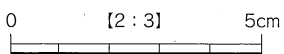
图9 出土土器(2)



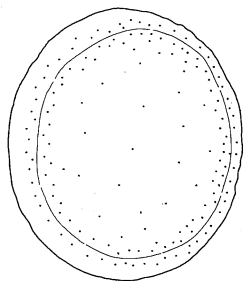
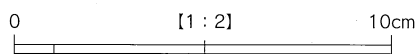
32



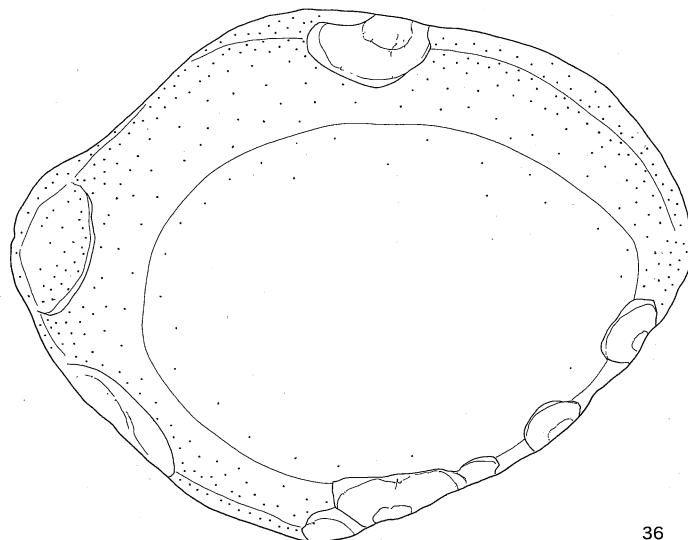
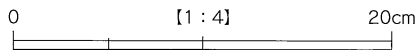
33



34



35



36

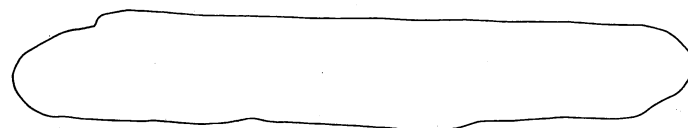


図10 出土石器(2)

第6節 縄文時代前期の遺物

遺物包含層は存在しない。I・II層より該期に属する土器片が出土している(図11)。

また石器に関しても、I・II層出土遺物の中に、いくつか該当する資料があると推測されるが、前節でも触れた理由から、前時代・時期の石器と完全に分離・識別することは不可能である。

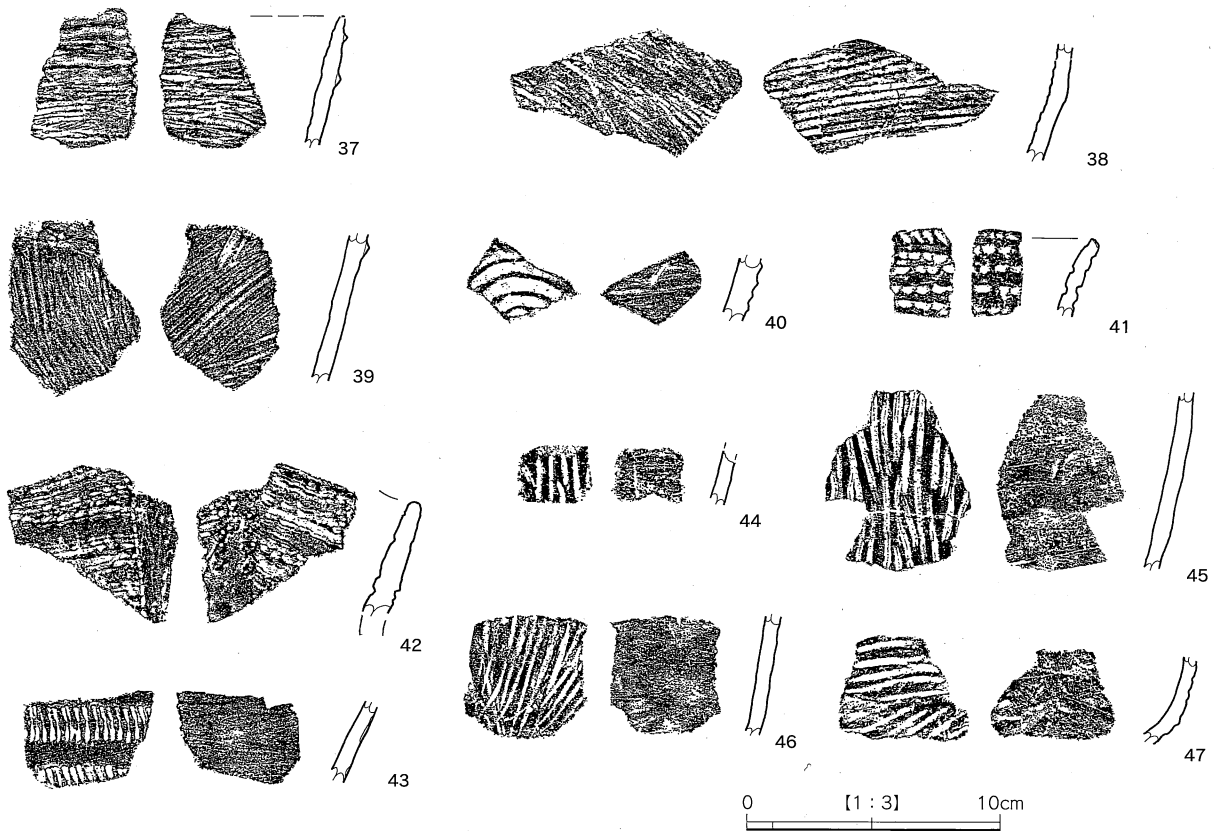


图11 出土石器(3)

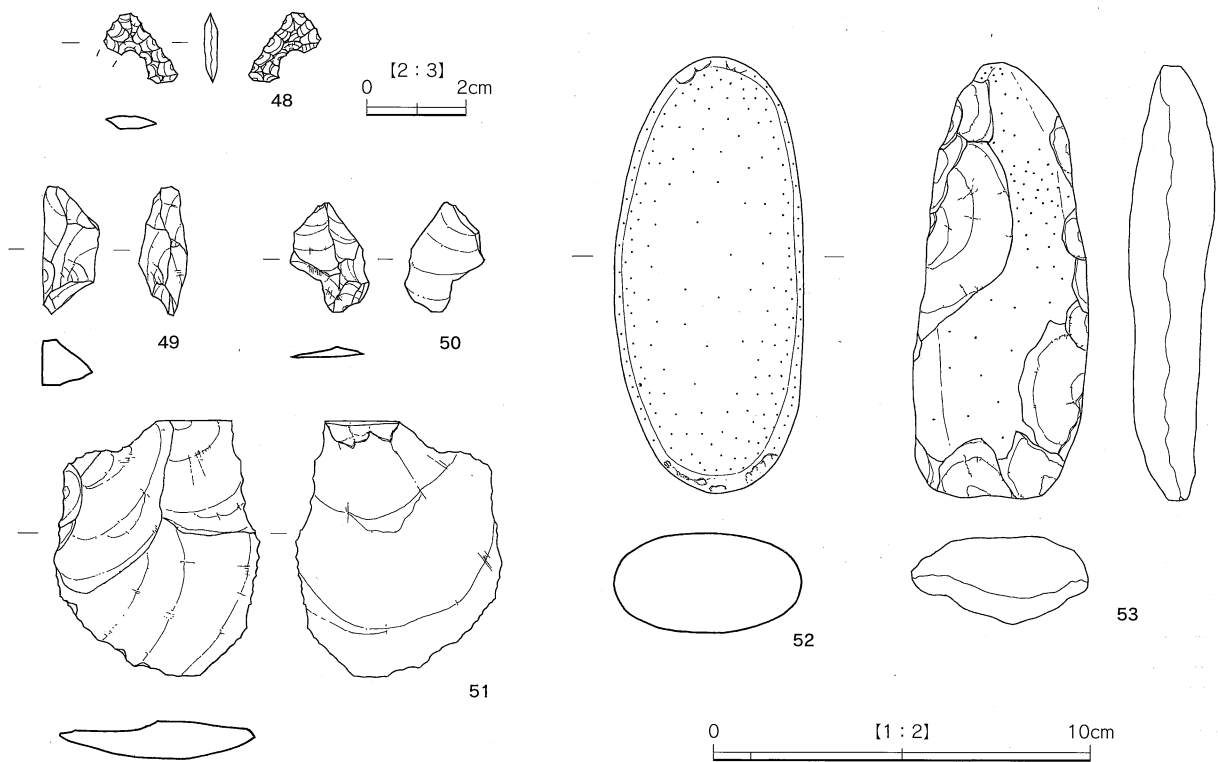


图12 出土石器(3)

37・38は外面に微細な突帯を貼り付けるもの。外・内面に地文として条痕を施す。39も外・内面に条痕を施す。おそらく胴中位辺りと推測され、わずかに屈曲する様子が認められる。40は貼り付けによる波状モチーフの突帯の頂部か。

41は口縁部の外・内面に列点文を施し、口唇部には刻目を入れる。

42は口径10cm程の小形の深鉢。胴部が張る器形を呈する。外面文様は3条単位の押引列点文であるが、区画を意図するところには、やや大きく深めの押引文を施している。内面にも同様の文様を横方向に施すほか、縦方向に2列の原体の刺突を付す。

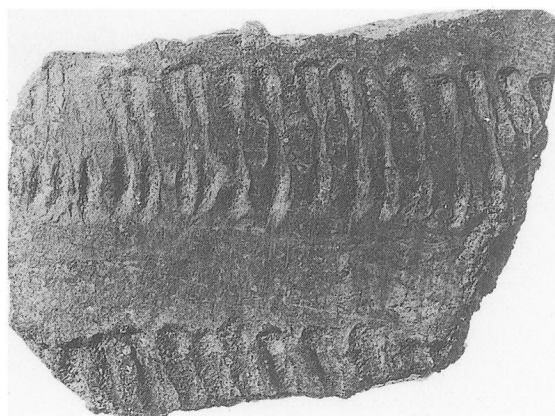


挿入図版2 42の押引列点文

43は外面に両端の深い、弧状の文様を施す。施文原体は不明である。内面はミガキに近い丁寧なナデ調整である。

44～47は、数条単位の平行沈線文を施す一群である。色調は黒褐色のものから橙色に近いものまで差異があるが、内面のナデ調整の具合は似通っており、同一個体のものが含まれている可能性が高い。

石器は、前述のとおり抽出が困難である。48の石鏃は抉りが深く、後出の要素を備えている。黒曜石製。52は頁岩製の剥片。54は石斧である。主に側縁からの打撃で整形しているが、刃部を含めて整形は粗い。



挿入図版3 43の弧状の文様

表2 遺物観察表(2)

図	番号	出土位置	層	色調(外/内)	調整・文様(外/内)	胎土(混入物等)	備考
9	11	C-3	Ⅲ	にぶい黄橙	楕円押型文/短沈線文・ナデ	黒色・白色粒	剥落
	12	A-2小穴	-	にぶい橙	楕円押型文/ナデ	白色・灰色粒	
	13	B-2	Ⅱa	にぶい黄橙/赤褐	楕円押型文/ナデ	褐色粒・径6mm大の小礫	摩滅
	14	A-2	Ⅱc	橙/にぶい橙	楕円押型文?/-	褐色粒	剥落著しい
	15	C-2	Ⅲ	灰黄褐/明褐	楕円押型文/ナデ	径5mm大の小礫	
	16	1号溝	-	にぶい黄/黄褐	楕円押型文/ナデ	黒色粒	偽口縁
	17	B-3	Ⅱa	にぶい黄	楕円押型文/ナデ	白色粒	
	18	B-2	Ⅱa	にぶい黄橙	楕円押型文/ナデ	赤褐色粒	
	19	B-4	Ⅰa	にぶい黄橙・浅黄	楕円押型文/ナデ	白色粒	
	20	A-2	Ⅱc	浅黄/黒褐	楕円押型文/ナデ	黒色粒(鉱物)	

図	番号	出土位置	層	色調(外/内)	調整・文様(外/内)	胎土(混入物等)	備考
9	21	A-3小穴	-	にぶい橙	楕円押型文/ナデ	白色粒(石英か)	
	22	C-1	I b	橙/にぶい黄橙	楕円押型文/ナデ	赤褐色粒, 径3mm 大の小礫	
	23	1号溝	-	にぶい黄橙	楕円押型文/ナデ	白色粒, 径3mm大 の小礫	
	24	C-2	III	橙	楕円押型文/ナデ		
	25	C-2	I b	にぶい橙・暗灰黄	山形押型文/ナデ	白色粒, 径1mm大 の小礫	壺形か
	26	B-3	III	明赤褐/にぶい黄橙	楕円押型文/ナデ	白色粒, 径3mm大 の小礫	剥落
	27	1号溝	-	にぶい褐/にぶい黄褐	楕円押型文/ナデ	白色粒, 径3mm大 の小礫	
	28	B-2	III	橙/にぶい褐	短枝回転文/ナデ	赤褐色粒	
	29	B-2	II a	にぶい黄橙	山形押型文/ナデ	白色粒	
	30	B-4	III	にぶい黄・暗灰黄	ナデ	黒色粒, 径3mm大 の灰白色小礫	器面に1~3mm大凹部あり
	31	B-2	III	黄褐/にぶい黄	ナデ	黒色粒(鉱物)	
11	37	B-2	II a	にぶい黄橙	条痕		微細な突帯
	38	C-2	II a	橙・にぶい黄褐	条痕	褐色・灰白色粒	
	39	B-2	II a	灰黄褐・褐灰	条痕	白色粒	微細な突帯
	40	B-2	II a	にぶい褐・にぶい橙	条痕	黒色粒	突帯
	41	B-2	II a	灰黄褐/褐灰	列点文	白色粒	
	42	B-2	II a	にぶい黄橙/にぶい 黄褐・黒褐	押引列点文	黒色(鉱物)・ 赤褐色・白色粒	波状口縁
	43	B-2	II a	黒褐/にぶい黄褐	弧状文/丁寧なナデ	黒色・灰白色粒	
	44	A-1	II b	にぶい黄橙	沈線文/ナデ		44~47, 同一個体か
	45	B-1	II a	黒褐/灰黄褐	沈線文/ナデ	黒色粒	
	46	B-1	II a	にぶい黄橙	沈線文/ナデ	黒色粒微量	
47	B-2	II a	にぶい黄橙/黒褐	沈線文/ナデ	黒色粒		

図	番号	出土位置	層	石 材	計 測 値(cm)	重量(g)	備考
10	32	B-2	III	水晶	長2.7/厚0.6	-	
	33	B-2	II a	姫島産黒曜石	長1.4/幅1.5/厚0.4	-	
	34	B-2	III	ホルンフェルス	長9.5/幅6.5/厚1.0	56.8	
	35	B-3	III	尾鈴山酸性岩	長14.1/幅12.4/厚6.4	1.8k	
	36	C-4	III	砂岩	長36.0/幅28.2/厚5.9	18.5k	
	12	48	C-2	I b	黒曜石	長1.4/厚0.3	-
49		表採	-	姫島産黒曜石	長3.3/幅1.5/厚1.2	-	
50		B-2	II a	チャート	長1.6/幅1.3/厚0.4	-	
51		C-3	I b	ホルンフェルス	長6.8/幅5.4/厚1.4	38.1	
52		B-2	II a	砂岩	長11.5/幅5.1/厚2.7	241.5	
53		B-2	II a	ホルンフェルス	長11.5/幅4.6/厚2.3	141.2	摩滅し, 表面黄白色

第7節 中世の遺構と遺物

(1) 概要

中世から近世にかけての遺物を多く含むII a層を掘り下げた後、下端面(Ⅲ・Ⅳ層ないしは基盤層の直上)で精査を行った結果、多数の遺構が検出された(図13)。

遺構は調査区南東部を除くほぼ全域で確認されている。検出された柱穴・小穴の並びから、「品」字形を描くように、掘立柱建物が3棟あったことが判明した。また、塀ないしは柵と推定される南北方向の柱穴列が確認されており、掘立柱建物を囲む、あるいは敷地内を画する機能が想定される。

ただし復原案の建物跡や柵・塀に絡まない柱穴・小穴も多くある。その中の多くは近世のものであると考えられるが、様相が複雑で建物跡などの復原は成し得なかった。その点も含め、図示した復原案については、報告段階での理解に基づくものであることを確認しておきたい。とはいえ、明らかとなった遺構群の主軸はほぼ南北方向を示しており、中世のある時期に、区画を有し一定の規範に基づいた施設が存在したことは疑い得ないと考えている。

1号掘立柱建物の確認された調査区南西端部(A-2・3区)付近では、各層のブロック(土塊)や礫、土師器の小破片を多く含む黒褐色土層がII a層下に堆積しており、縄文時代の遺物も混入している。このことから、II c層と名付けられたその層は中世の遺構構築時に尾根状地形部を削り、1号掘立柱建物の付近に盛土・整地した結果生じた、一種の造成土と考えられる。付近の土層図(図3)上では、南側はあたかも掘り込み地業を施したような堆積状況を示している。また次第に標高が低くなる北側では、このII c層に似た土質の層が堆積しており、盛土が流失した結果の堆積物と考えられる。

調査区北端部近くは、段状をなして下っており、数段の平坦面を形成している。北西端部付近が最も低くなる。段状の落ち際に沿って、布掘り状の柱穴列があることや、平坦面上に柱穴列が認められることから判断して、それらは人工的な作事の跡であろうと考えられる。調査区のさらに北側は、急激に下って小丸川の現河床に至る。遺跡の直下は、現状で

は深い淵となっており、かつては舟の往来も可能であったらしい。

(2) 掘立柱建物

1号掘立柱建物は、調査区南西部にある2×4間の南北棟である(図14)。梁行総長4.4m、桁行総長7.4m。梁行柱間は1.8~2.5m、桁行柱間は北端の1間のみ1.5m、他は2.0mである。柱掘形は、南妻柱のみ径0.3mの円形であるが、その他については一辺長0.4~0.6mの隅丸方形となる。柱穴の深さは概ね検出面から0.6m内外であるが、東側柱の北第1柱穴のみ浅い。一方、西側柱列の柱穴は掘形が大きく、方形を意識して掘削されている。

柱掘形の埋土は褐色ないしは灰黄褐色を呈する。柱痕跡は明瞭でない。北妻柱の辺りは2号土坑と重複している。また性格不明の小溝とも重複するが、新旧関係は判らない。床張りであったとみられ、床束が確認できる。

柱穴内より遺物が少量出土している(図15)。54・55ともに土師器の皿・小皿である。いずれも東側柱北第1柱穴より出土。

2号掘立柱建物は1号建物の東にあり、2棟は妻柱筋を揃える形で建つ(図16)。やはり2×4間の南北棟であるが、ややいびつな平面形を呈しており、南妻柱筋は乱れている。梁行総長3.6m、桁行総長8.1m。西側柱列は柱筋の通りもよく、柱間寸法も1.9~2.0mでほぼ等間となる。さらに柱掘形の規模も径0.4~0.5mで揃う。一方、東側柱列は、柱筋は一応通るものの、柱間は1.5~2.4mと差が大きい。

柱掘形の埋土は褐色を呈する。柱痕跡は確認できなかったが、西側柱北第2柱穴と第4柱穴の底面に柱の下端が接した「あたり」の痕跡が認められた。

南妻柱筋で1号溝と重複しており、切り合いの観察から、新旧関係は2号掘立柱建物→1号溝と判断できる。図化可能な遺物は皆無であった。

3号掘立柱建物は、調査区の北寄りに位置する1×4間の東西棟(図17)。梁行柱間は2.0m、桁行総長は6.9m。桁行柱間は概ね2.0mであるが、東端の1間のみ1.3mとなる。柱掘形は0.3~0.5mの円形で、埋土は褐色・にぶい黄褐色を呈する。

5号・6号・7号土坑、1号石組遺構と重複して

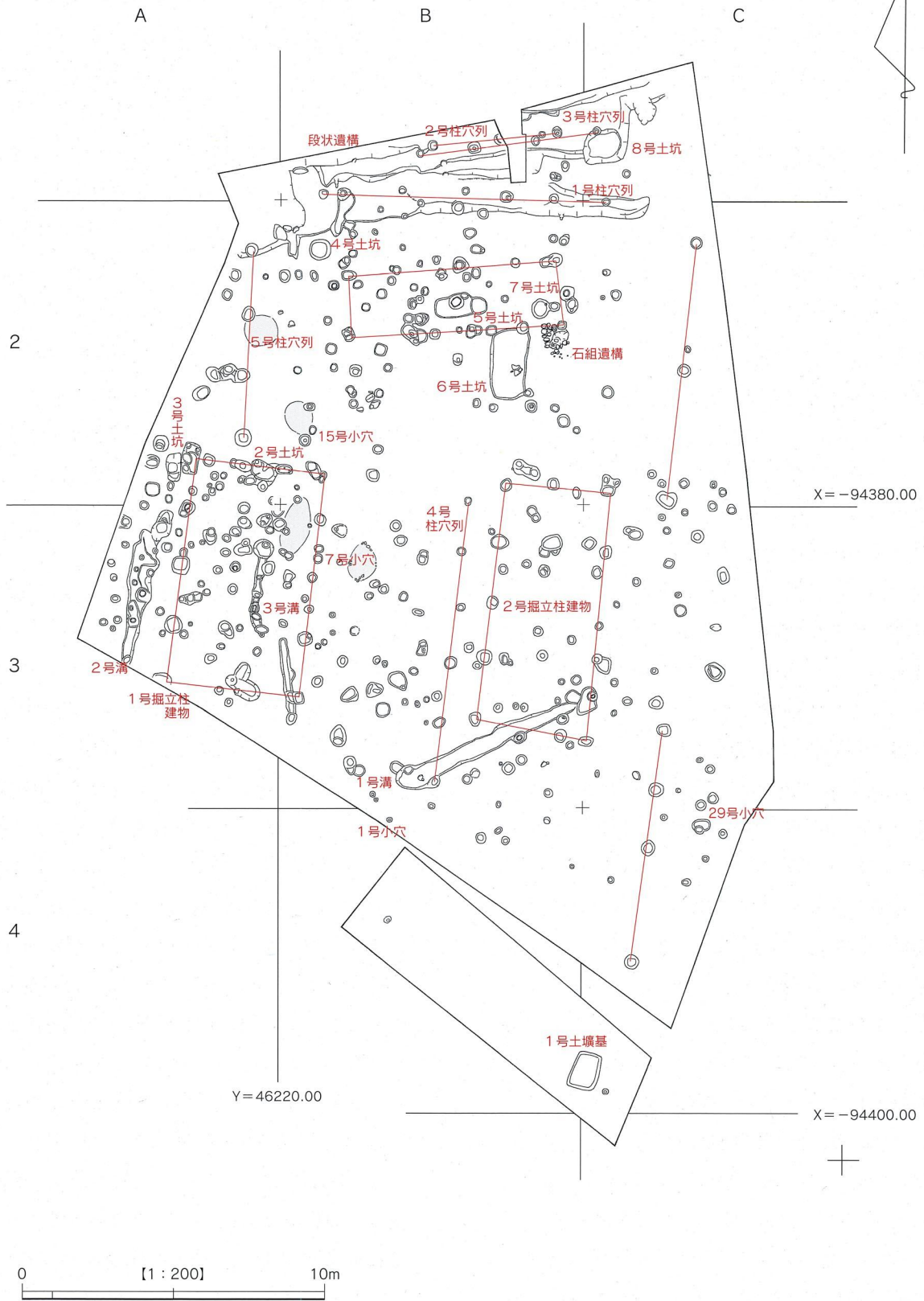


图13 II層下端面検出遺構

おり、6号土坑・1号石組遺構→3号掘立柱建物という新旧関係であったと考えられる。

遺物は南側柱東第1柱穴から陶器の底部(64)が、東第3柱穴から土師器の供膳具(62・63)が出土している(図18)。62は小皿。63は口縁部が大きく開く皿である。

(3) 段状遺構

調査区北端部近くで確認された地山の段状の落ち部と平坦面を標記のとおり仮称しておく(図19)。おそらくは地山を開削したものと考えられる。東側と西側で異なるが、最大で3枚の平坦面が階段状に成形されている。調査区北西端部が最も低くなる。平坦面上には柱穴列が認められる。

(4) 柱穴列

塀ないしは柵と推定される柱穴の並びが5条認められる。

1号柱穴列は上記の平坦面上に築かれている(図19)。段の落ち際に沿って、ほぼ東西方向に並んでいる。東側は浅い溝の中にあり、布掘り状となる。5間分が確認されているが、柱筋の通りはよくない。柱間は1.6~2.1m。柱掘形の径は0.2~0.45m。

2号柱穴列と**3号柱穴列**も、段状遺構の平坦面上に築かれている(図19)。柱穴は基盤に掘り込まれている。新旧関係は不明であるが、同位置で改築されたのであろう。崖近くに建てられた建物の一部である可能性も残る。柱間は概ね2.0m、柱掘形の径は0.25~0.4m。いくつかの柱穴では、柱痕跡が明瞭に観察できた。柱痕跡は、木質が腐植化したような橙色に近い明褐色を呈しており、使用された柱の径は約10cmであることが判る。

4号柱穴列は、2号掘立柱建物の西側柱筋より西1.2mの位置に、同一の軸方向でもって並ぶ。5間分が確認できる(図16。ただし北3間分のみ図化)。柱間は1.8~2.0m、柱掘形の径は0.25~0.4m。柱筋の通りはよくない。

5号柱穴列は1号掘立柱建物の北にある、南北方向に並ぶ柱穴列である(図20)。柱間は2.0mの等間となる。柱掘形は径0.45~0.55mで、比較的大きい。最も北にある柱穴は、段状遺構の落ち際に築かれている。北第3柱穴のみ、やや浅い。

柱掘形の埋土は、北と南で違いが認められる。北の2基の柱穴は、にぶい黄褐色を呈するのに対し、第3柱穴は褐色、第4柱穴は暗褐色となる。これは構築された位置の基盤層の違いによるものと考えられる。北側にあるものは、基盤の黄白色砂が混じり、黄色味が増すのであろう。

以上のほか、図13では、調査区東側に2条の柱穴列を図上復原しているが、やや柱間が広く、真偽の程は定かでない。ただし拾い上げた柱穴は、いずれも一定以上の深さを有するものである。

(5) 土坑

計8基確認された。うち1号については墓と認定されるため「1号土壙墓」と表記する。

1号土壙墓は調査区南東端部で検出された(図21)。埋土中より副葬品や骨片などが出土している。ただし、おそらくは道路造成の際に付近を地下げしているとみられ、上部が削平されている。その結果、検出面(IV層面)からの深さは0.15~0.25m程度となっている。平面規模は2.5m×1.8m、形状は隅丸長方形を呈する。オリーブ褐色を呈する埋土はしまりがなく、灰褐色の土塊や小礫、炭化物を含む。

副葬品は銭貨が16枚(+α)、数珠玉が1点認められた(図22)。銭貨は数枚が錆着している状況であった(表7)。玉はガラス製で青色を呈するが透明感がなく、くすんだ感じである(72)。白色の縞状文様を描く。完全な形で出土しているが、縦方向に断裂線が入っており、仮にそこで割ったならば真二つとなる。製作時に、そこで接合した可能性もある。その他、鉄釘と棺材の木質が残存していた。釘は断面が方形のものである。

2号土坑は1号掘立柱建物の北妻柱の位置にあり重なり合う遺構である(図14)。1号掘立柱建物より新しい遺構であろう。0.9m×0.6mの隅丸長方形を呈する。床面までの深さは0.3mであるが、北端部にあるピット状部分は、床面からさらに0.5m程深くなる。

埋土はにぶい黄褐色を呈する。土師器供膳具の小破片を多く含んでいるが、図化可能な個体は限られる(図15)。57は口縁部付近を欠くものの、それ以下の部位は全周にわたって残存している。外・内面

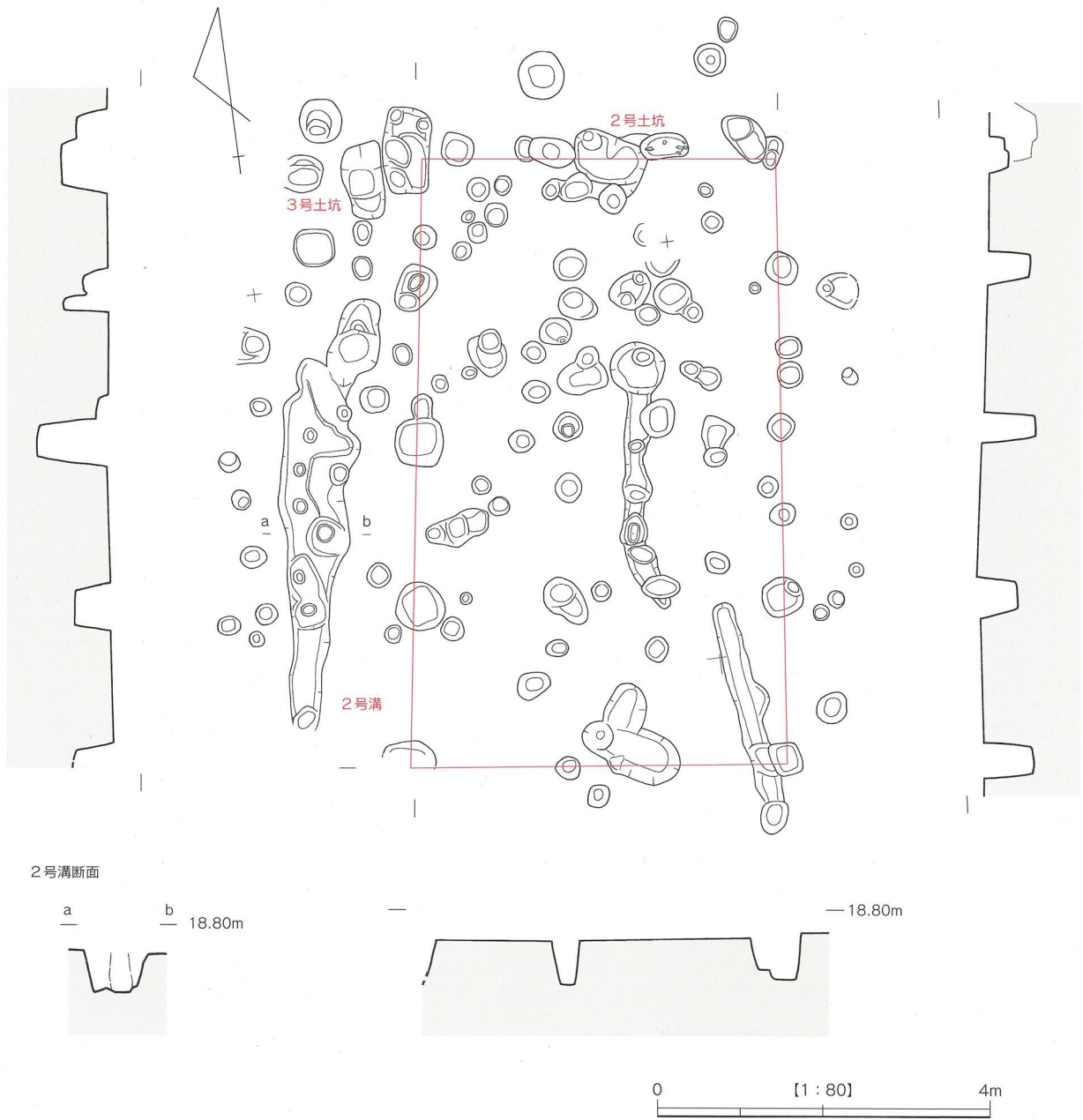


图14 1号掘立柱建物·2号土坑·3号土坑·2号沟

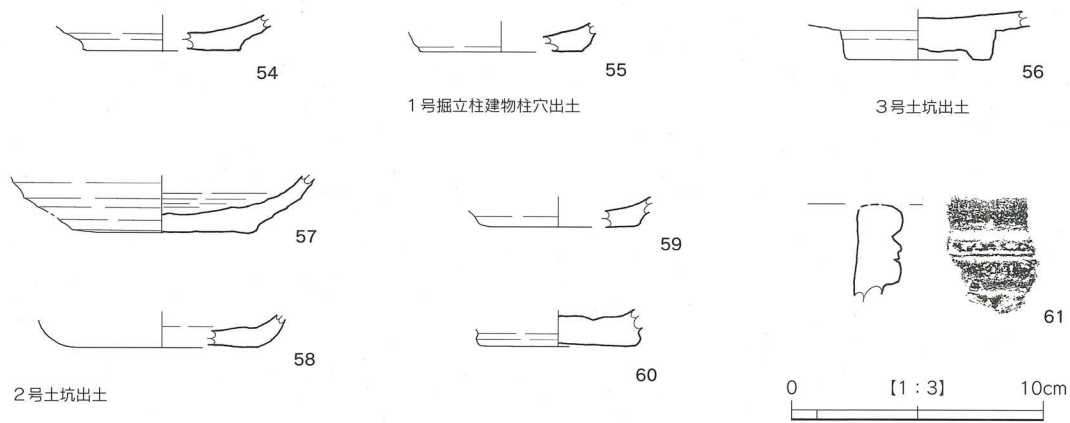


图15 1号掘立柱建物·2号土坑·3号土坑出土物

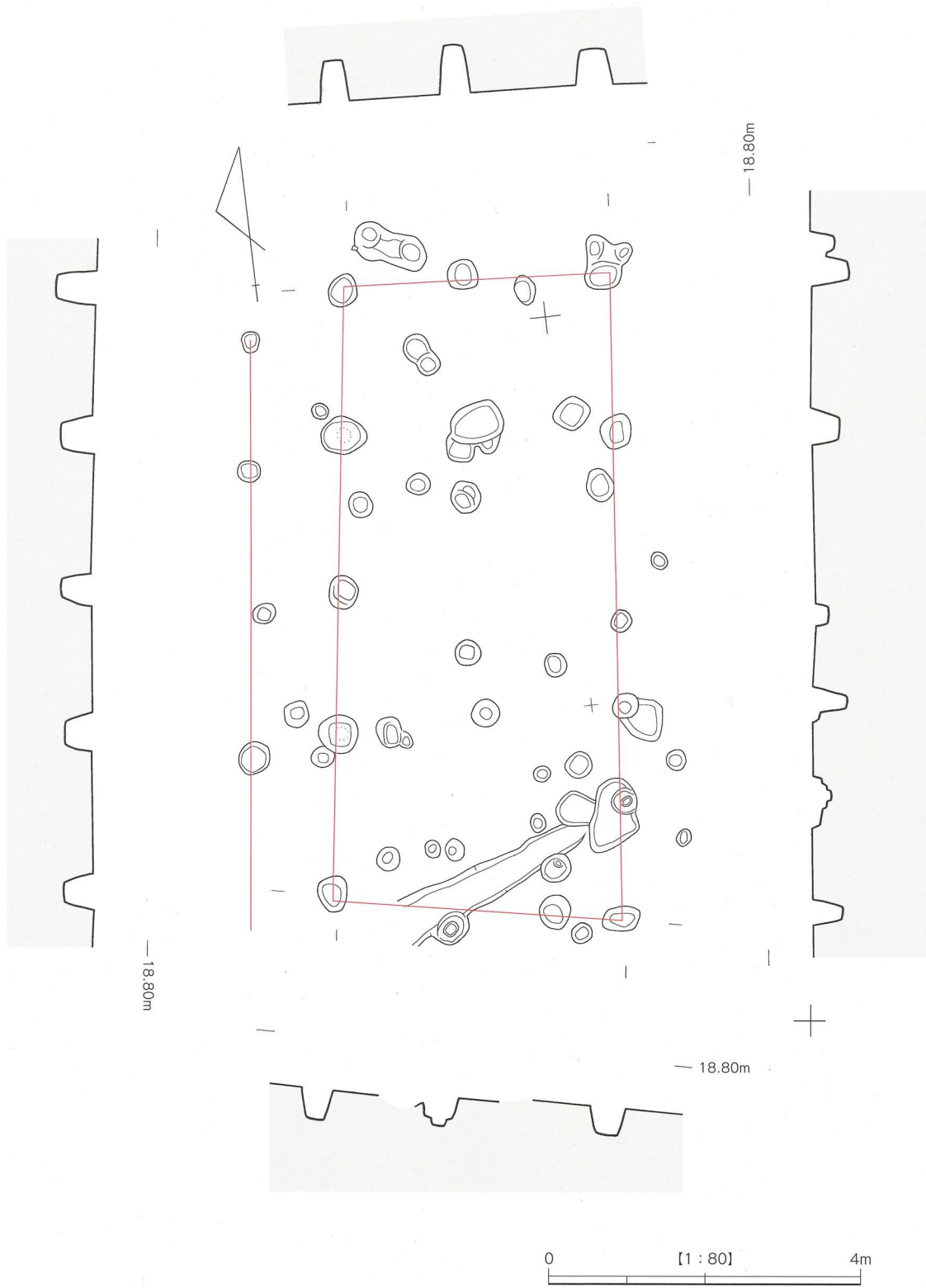
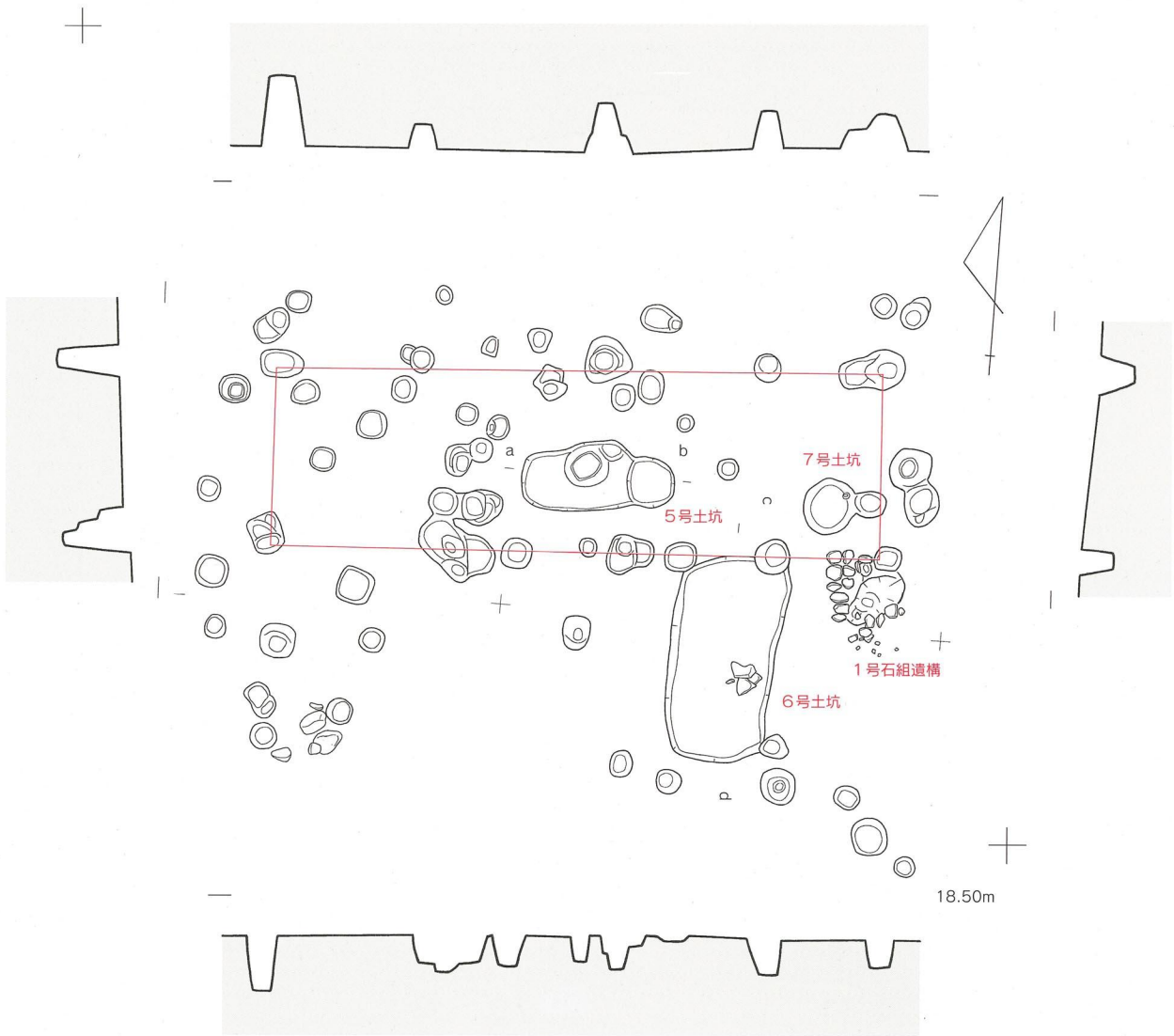
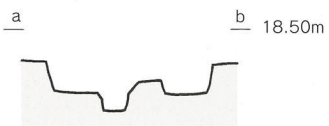


图16 2号掘立柱建物



5号土坑断面



6号土坑断面

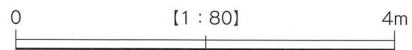


图17 3号掘立柱建物、5号·6号土坑

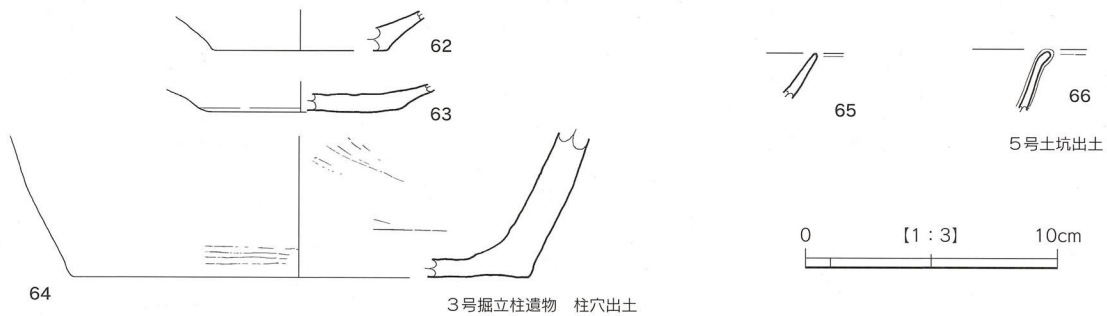


图18 3号掘立柱建物·5号土坑出土遺物

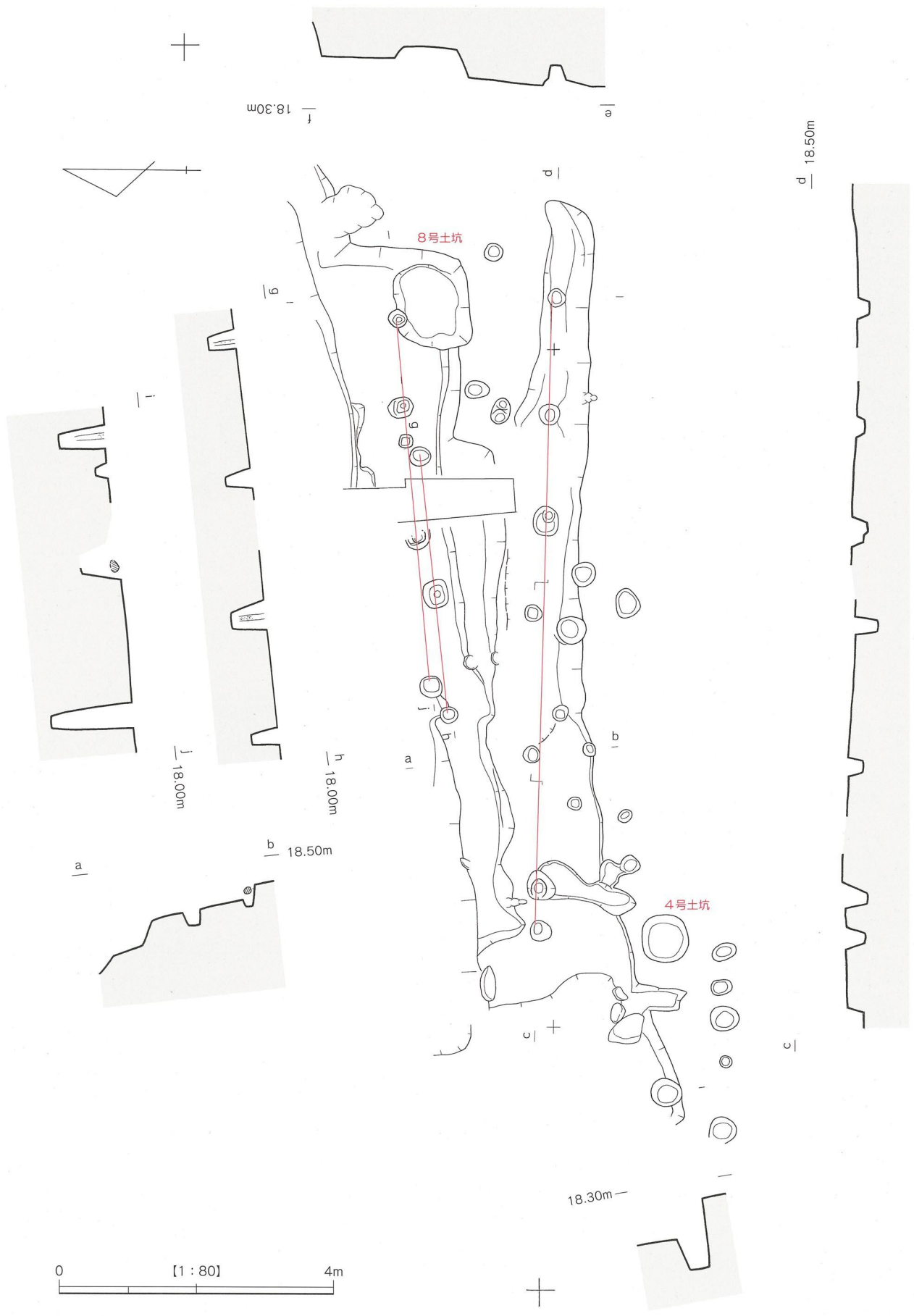


图19 段状遺構・1号~3号柱穴列

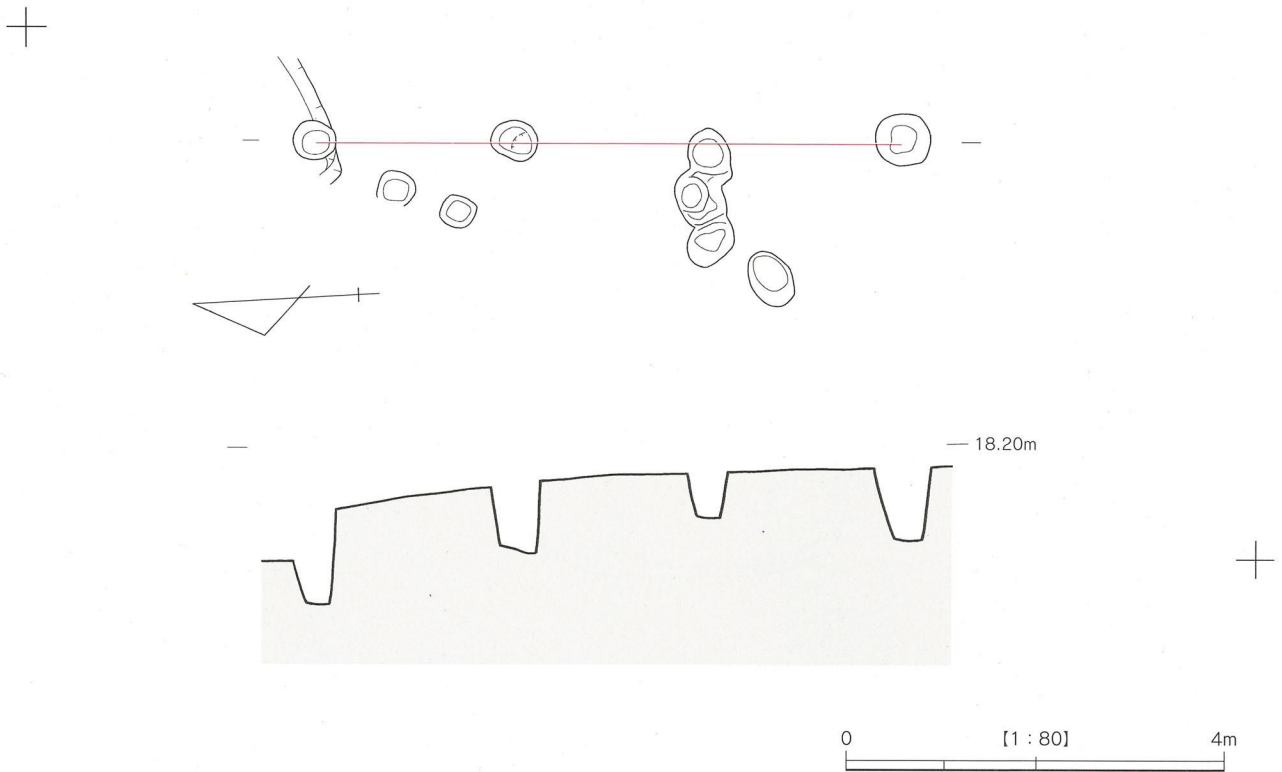


図20 5号柱穴列

に回転調整に伴う段がみられる。底部は接地面が外に張り出す形状となる。60は円盤状を呈する小皿の底部。61は深鉢形の火鉢であろう。土師質で胎土中に繊維質の混入物が認められる。また鉄製品が1点出土しているが、錆の付着が著しい。

3号土坑は、1号掘立柱建物の北西隅の位置にある(図14)。その位置の柱穴が形状を止めていないことから、1号掘立柱建物より後に築かれた遺構と判断できる。0.9×0.5mの隅丸長方形で、最深部の深さは0.6m。埋土土色は暗褐色を呈する。青磁碗の底部が出土している(56)。

なお、遺構番号は付さなかったが、3号土坑と接する位置に同規模の土坑がある。また南にも、やはり同種の土坑がみられる。掘立柱建物廃絶時に行われた、何らかの行為の痕跡であろうか。

4号土坑は調査区北西部にある円形の土坑(図19)。段状遺構の落ち際に近い。径0.7m、深さは約0.3m。埋土中に炭化物粒を多く含むため、埋土は他の遺構と比較して灰黒色味が強い。目立った遺物は出土し

ていない。

5号土坑は3号掘立柱建物と重なる。関係については判断できない。中央やや北側と長軸方向の東側は、他の小穴と重なる。埋土は灰色がかった褐色を呈し、炭化物、礫を含む。土師器杯ないしは皿(65)、青磁碗(66)の口縁部片が出土している。

6号土坑は3号掘立柱建物に先行する土坑。2.5m×1.3mの長方形を呈し、深さは約0.2m。埋土は灰褐色の比較的やわらかな土質。炭化物を含む。出土遺物は少ないが10~25cm大の角礫がみられた。

7号土坑も3号掘立柱建物と重なる。関係は判らない。径0.6mの円形で深さは約0.25m。埋土は灰褐色土でやや粘質。目立った出土遺物ない。

8号土坑は段状遺構の東端部近くにある。1.5m×1.2mの方形で、南側との段差は約0.5m。段状遺構と関係する遺構であるのか、時期差があるのか判然としない。埋土は黒褐色土で、黄白色粘土を含む。規模の割に出土遺物は少なく、図化可能なものは皆無である。

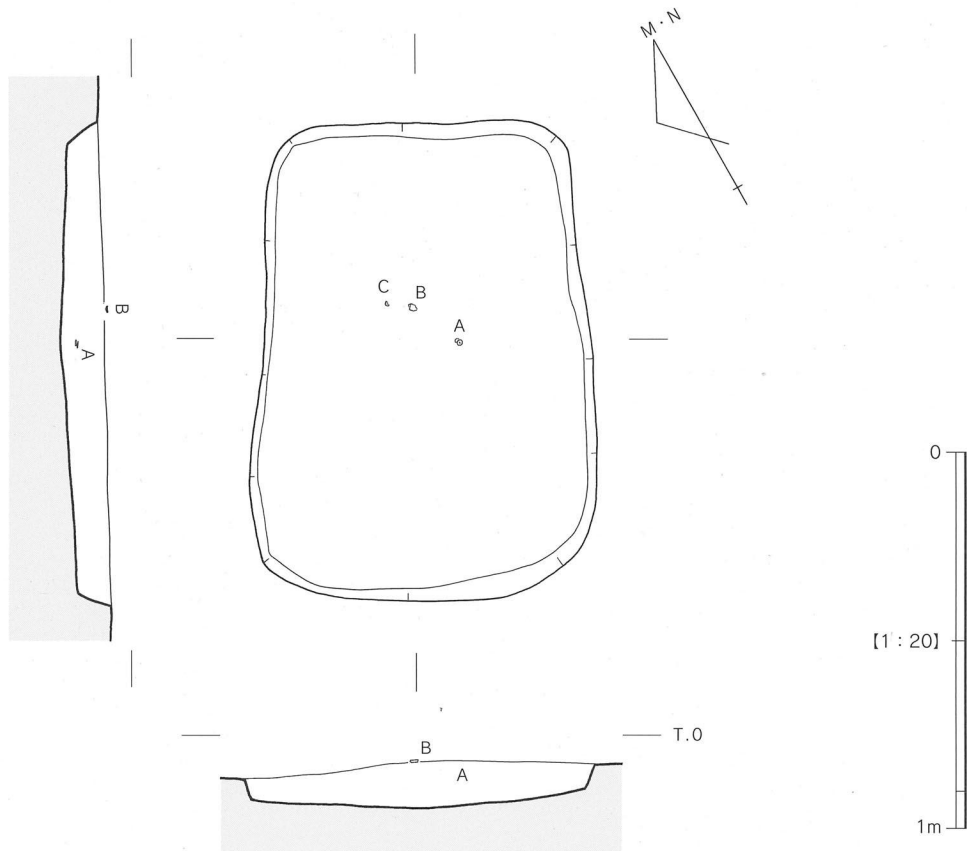
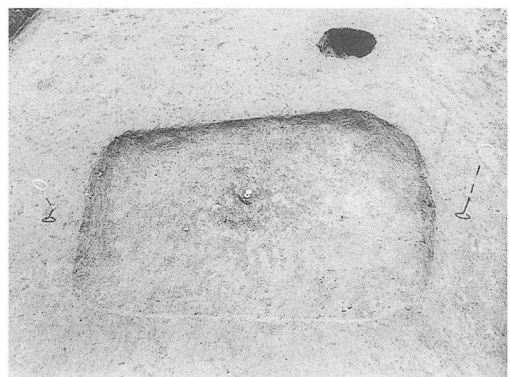
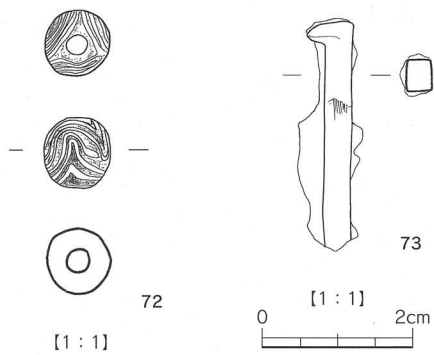
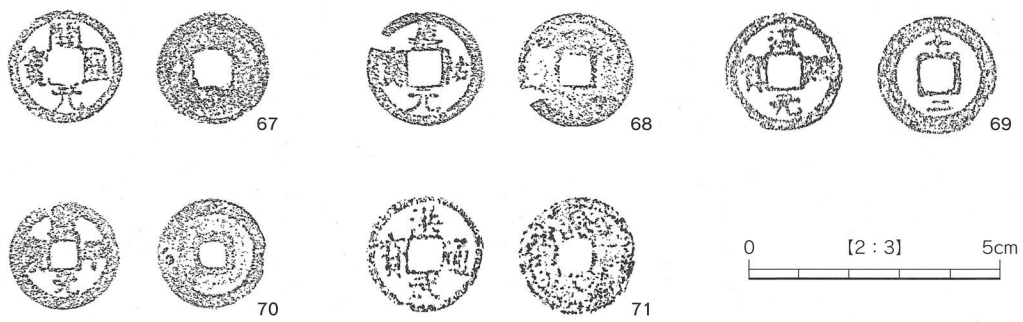


图21 1号土壙墓



挿入図版4 1号土壙墓【北西より】

图22 1号土壙墓 出土遺物

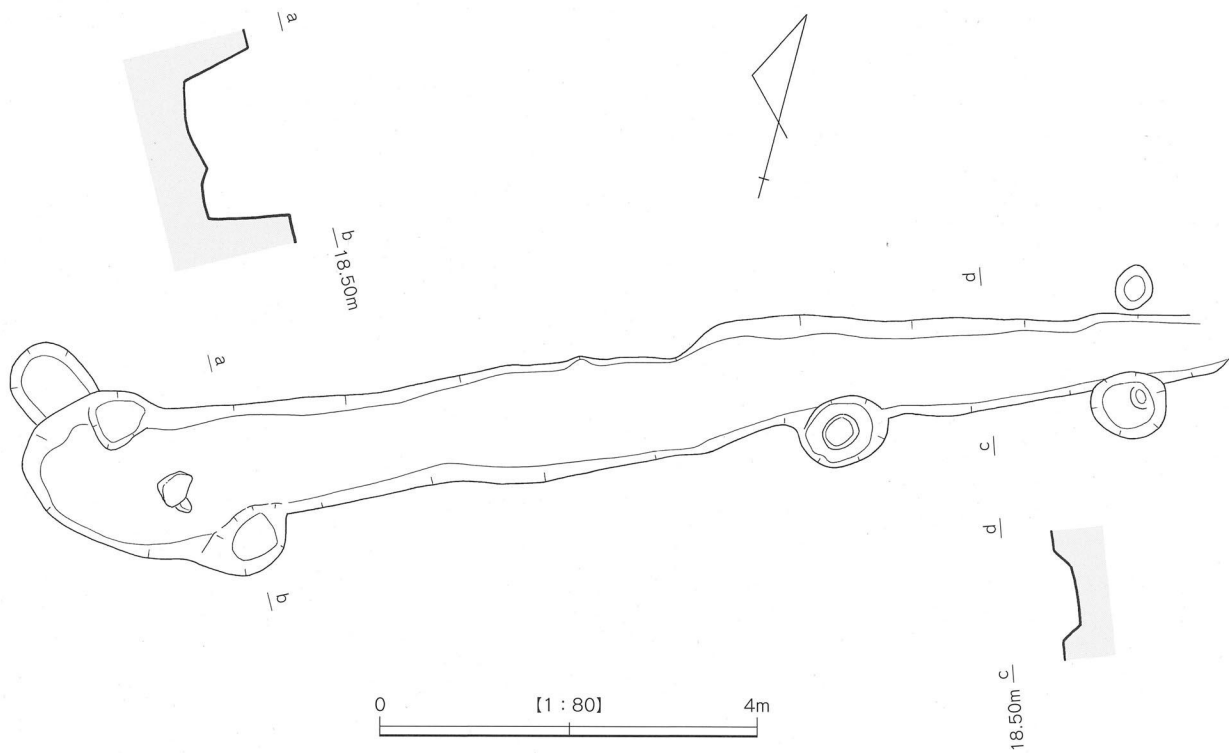


図23 1号溝

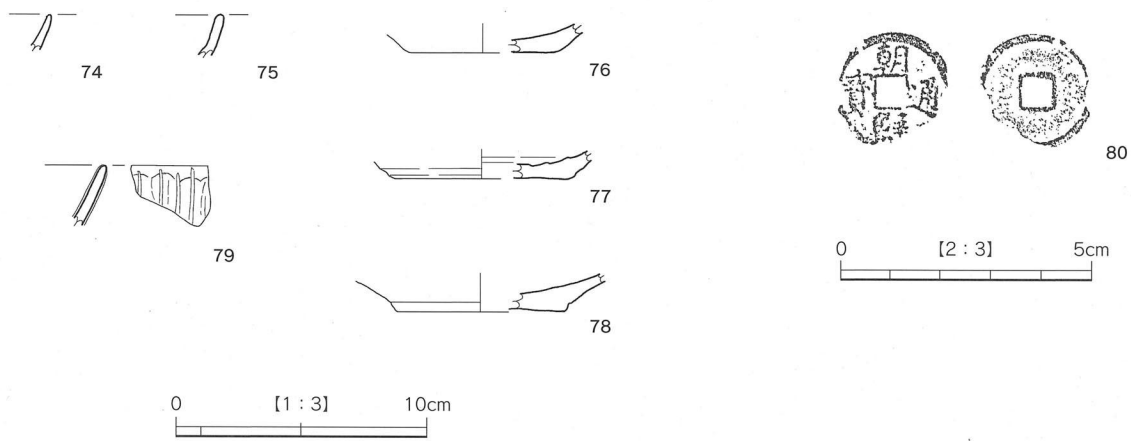


図24 1号溝 出土遺物

(6) 溝状遺構

主軸が北から大きく偏する1号溝状遺構(以下「状遺構」は略)のほか、1号掘立柱建物の近くで規模の小さなものが3条検出された(2号溝など)。

1号溝は、調査区の南側にある(図23)。2号掘立柱建物との関係は前述の通りである。東端部は、比較的新しい遺構の影響を受ける。

主軸が北から約65°東に偏しており、建物などとは大きく異なっている。埋土はやや灰色がかった黒褐色土で、基盤層のブロックや黄色のパミスを多く含んでいる。土層断面を観察した結果では、自然に堆積したのではなく、埋め戻された状況を示している。土師器の供膳具や青磁碗、銭貨などが出土している。

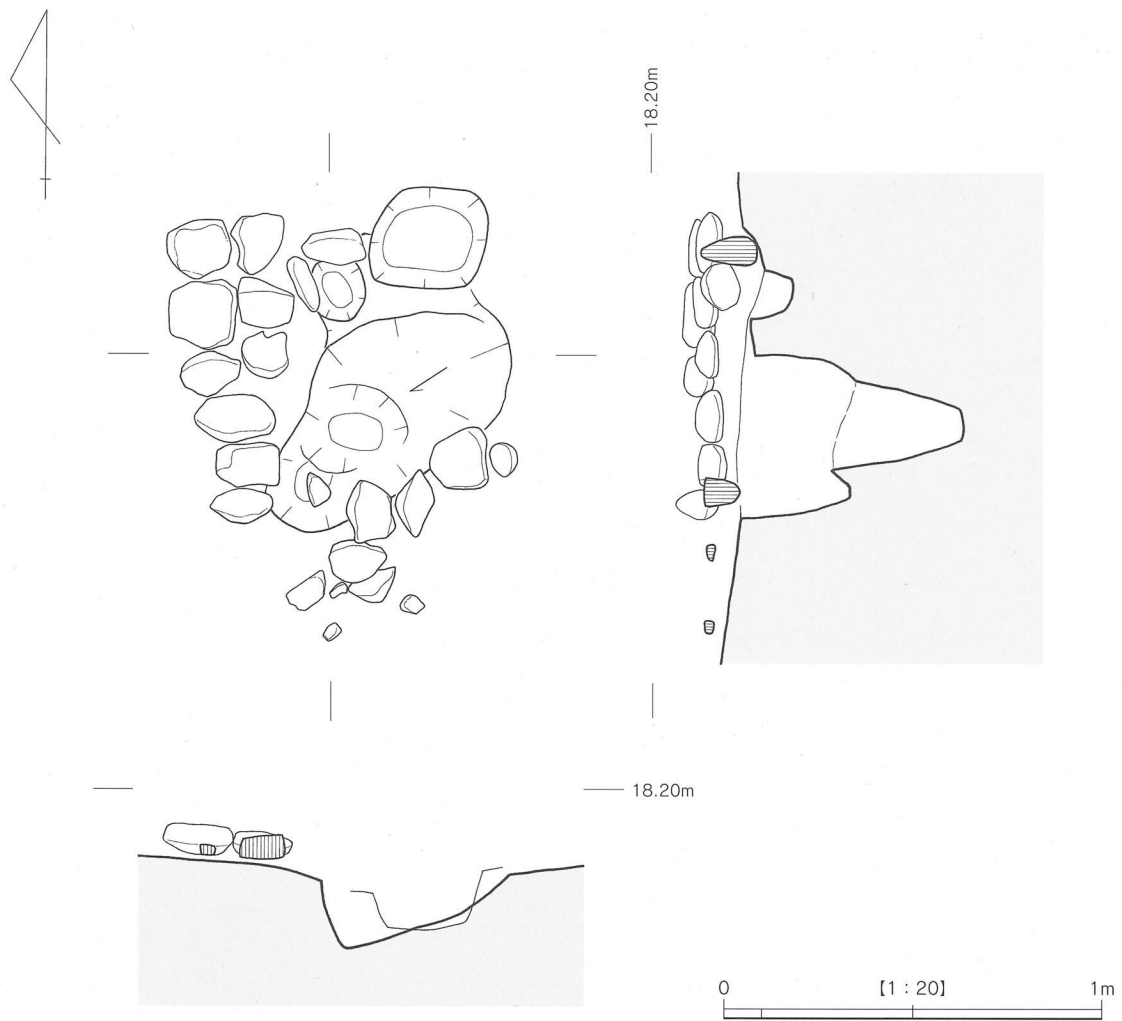


図25 1号石組遺構

青磁碗(79)はこの遺構の年代を知る上で重要であり、さらに重複関係にある2号掘立柱建物の下限も定まる。80は「朝鮮通寶」である(図24)。

2号溝は、1号掘立柱建物の西側柱筋の西隣(約1.2mの位置)にある(図14)。主軸は建物とほぼ同一となる。

検出された時点で、黄白色粘土の詰まった小穴が多数みられた。それらの底面と溝の底とのレベル差は10cm程度である。1号掘立柱建物の付帯施設と考えたいが、1号掘立柱建物と重なる位置に同様の小溝(3号溝)があり、問題を複雑にしている。ただし3号溝内にある小穴には、黄白色粘土は含まれない。

(7) 石組遺構

1号石組遺構と呼ぶものは、3号掘立柱建物の南東隅近くにある礫を「コ」字状に配列した遺構である。3号掘立柱建物と重複する。構成礫の下端はII a層下部にあたる。15~20cm大の比較的扁平な自然礫(砂岩など)を並べている。二段以上に積み上げるものではない。構成礫にさほど明瞭な赤化は認められない。礫に囲まれた空間には落ち込みが認められ、東側の立ち上がりはスロープ状を呈している。埋土は炭化物や赤化土粒、小礫を含む暗灰黄色土で、最深部近くでは炭化物が多くなり、黒色味が増す。関連する遺物はない。

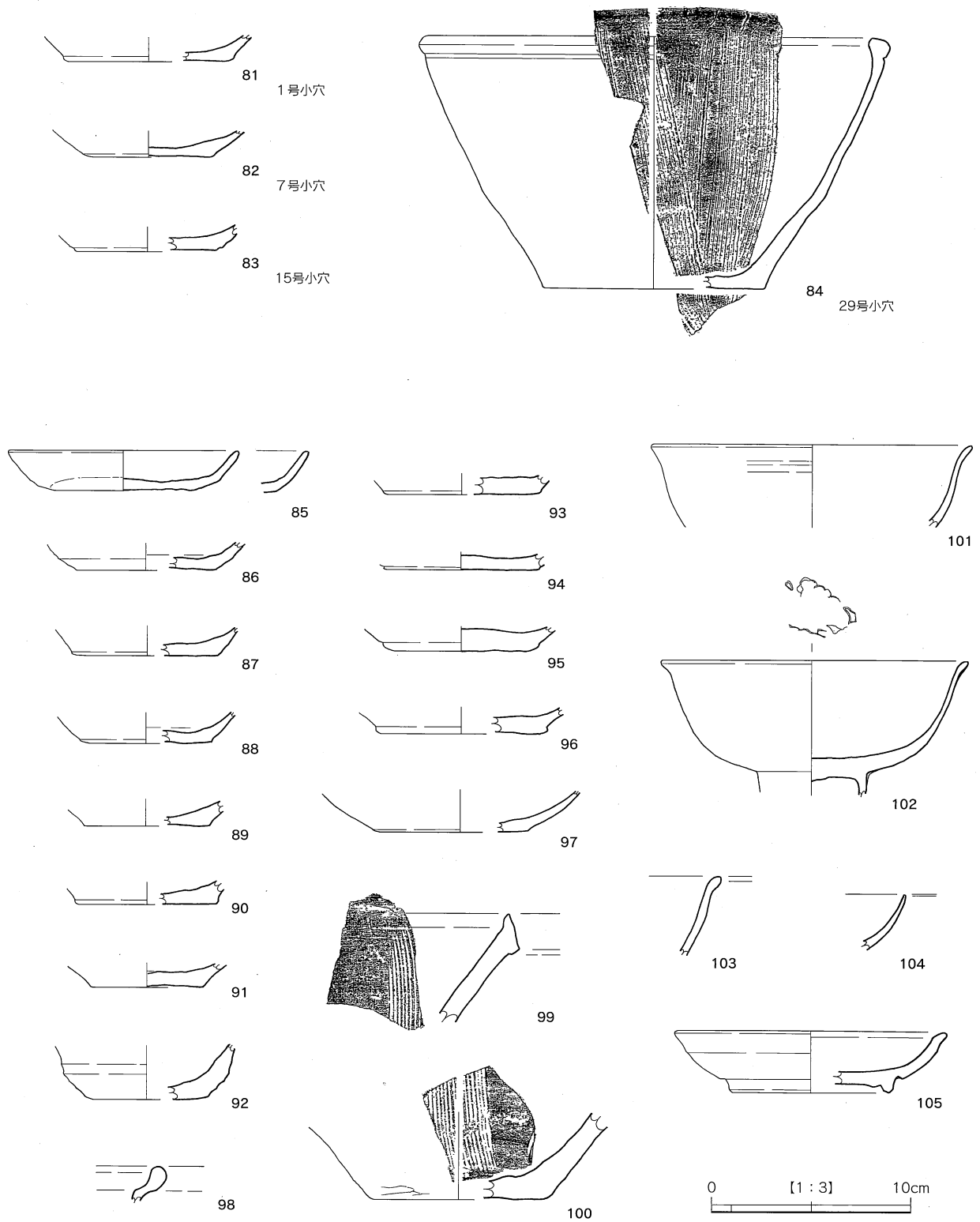


图26 小穴·IIc层出土遗物

(8) II c層に伴う礫の集積

II c層の堆積範囲内に、小礫が集中する箇所が4箇所認められた(図13中の薄いアミかけ部)。土師器の小破片も混入している。盛土・整地の際に混入した小礫と考えられる。円礫・角礫ともにみられ、一部に赤化したものもある。

(9) その他の遺構

これまでに触れたもの以外(主に小穴)については、1号掘立柱建物よりも年代が下の遺構であると考えられる。埋土の土色は、概ね灰色がかかった褐色を呈しており、II a層の色調に近い。そのことから(1)の項でも触れたとおり、近世の遺構と推定される。

遺物は概して少ない。図化した29号小穴出土の陶器(84)や1号・7号・15号小穴出土の土師器(81~83)が目立つ程度である。

84は焼締陶器の播鉢である。1~2mm間隔で播目が密に施される。外面には横方向の沈線が巡る。

(10) II c層出土遺物

造成・整地土中の遺物であり、一括資料に準じた扱いが可能と考えられる(図26, 85~105)。総出土点数(破片数)は161点で、うち土師質供膳具が152点(94%)を占め、他は土師器煮沸具1点、国産陶器(備前系播鉢)3点、中国産陶磁の青磁3点、白磁2点という構成である。細片化が進んでいるとはいえ、土師器供膳具の比率が高いことが指摘できる。染付は皆無であった。

土師器供膳具(85~97)の中で全形の判る個体は85のみである。やや器高が低いが、杯としておく。97は体部が内湾する形態の皿であろう。その他、小皿が一定量みられる。

土師器煮沸具は98の1点のみ認められた。土鍋であろう。外面に煤が付着している。

備前系播鉢(99・100)は断面三角形の口縁部と底部がある。おそらく同一個体であろう。

青磁は龍泉窯系の碗・皿が出土している。101は発色が悪く、くすんだ感じとなっている。102は内面見込にスタンプ文が刻されるが、明瞭でない。

白磁は皿が2点出土している。105は淡い青灰色の釉をかけている。畳付部から高台内面にかけては露胎となる。

(11) 段状遺構付近出土遺物

段状遺構を覆うII a・II b層より出土した遺物をまとめている。後述するII a層出土遺物と傾向は変わらないようであるが、出土平面位置が特定できるため分離し掲載する(図27, 106~112)。

やはり土師器供膳具が高い比率を占める(106~114)。114は糸切り底のもの。中国産陶磁では龍泉窯系青磁碗(115)や皿(116~118)、染付碗(119)が認められる。120は灰釉陶器の口縁部か。121は削り出しによる高台を有する。122は備前系陶器の大甕。北西端部付近で比較的まとまって出土している。

(12) II a層他出土遺物

II a層は中世の遺構を覆う形で堆積した遺物包含層。土師器供膳具や中国産陶磁、国産陶磁器ほか各種遺物が出土している。またI層中にも土師器供膳具の小破片など若干の遺物が含まれる。ここでは特徴のある遺物のみ記載する。

140は外面に黒色の釉をかける陶器。口縁部の内面がわずかに張り出す。褐色の胎土で、内面は露胎となる。瀬戸系の香炉であろう。

141・142は雷文帯を施文する青磁碗。かなり簡便化された文様である。143~145は蓮弁文を施す青磁碗。蓮弁の単位がかるうじて残るものと、崩れたものがある。150の高台内は露胎となる。

152は白磁の高台付杯。体部中位で屈曲する。全面に釉がかかる。

155~158は染付皿。155は外面胴部に唐草文を施す。157と158は、いわゆる碁笥底となるもの。

159~162は肥前系の磁器。162は小杯である。

164はB-2区II a層出土の茶臼(下臼)の受皿片。砂岩製。上面は極めて平滑となっており、黒色の付着物が認められる。外面には粗い加工痕が残る。

165・166は中~近世瓦。いずれもA-2区のII a層出土。時間的に下ると目されるこの資料は、垂直位置の記録がないが、II a層でも上端部のレベルで出土したものであろう。

土錘は図化した2点(167・168)以外に1点出土している。167はB-2区のII a層出土。168は段状遺構内(C-1区)より出土している。

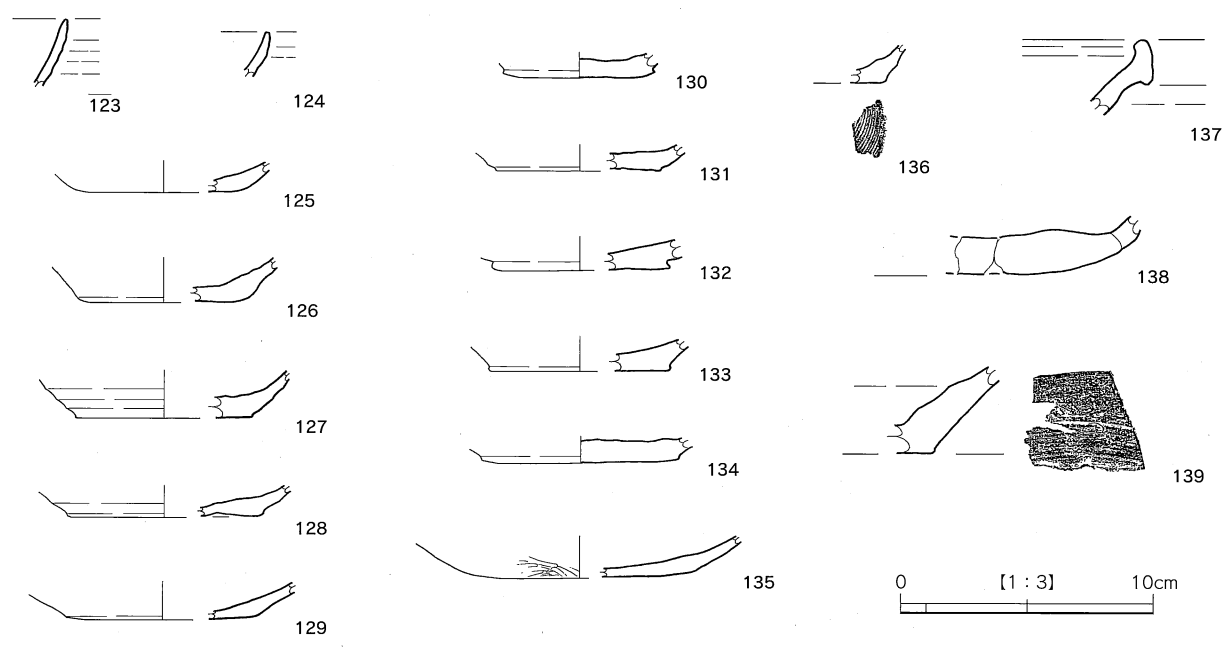
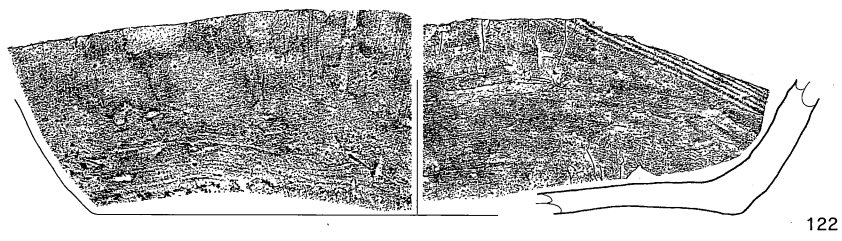
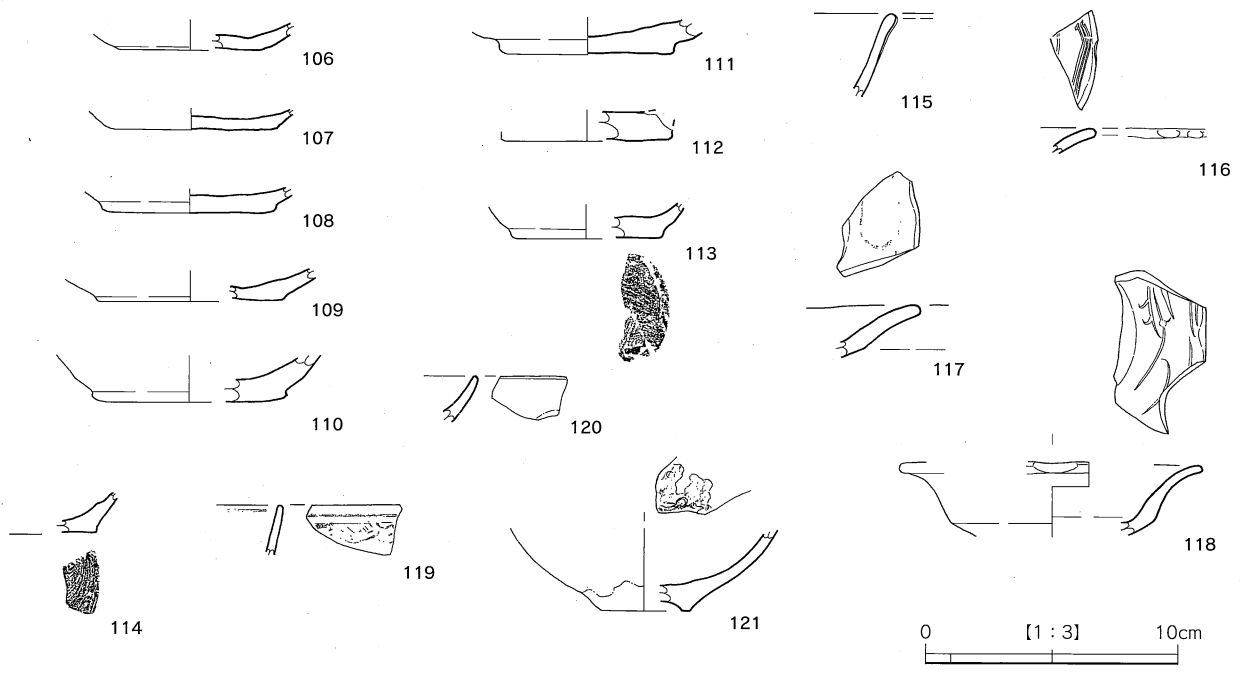


图27 段状遺構・小穴・Ⅱa層他 出土遺物

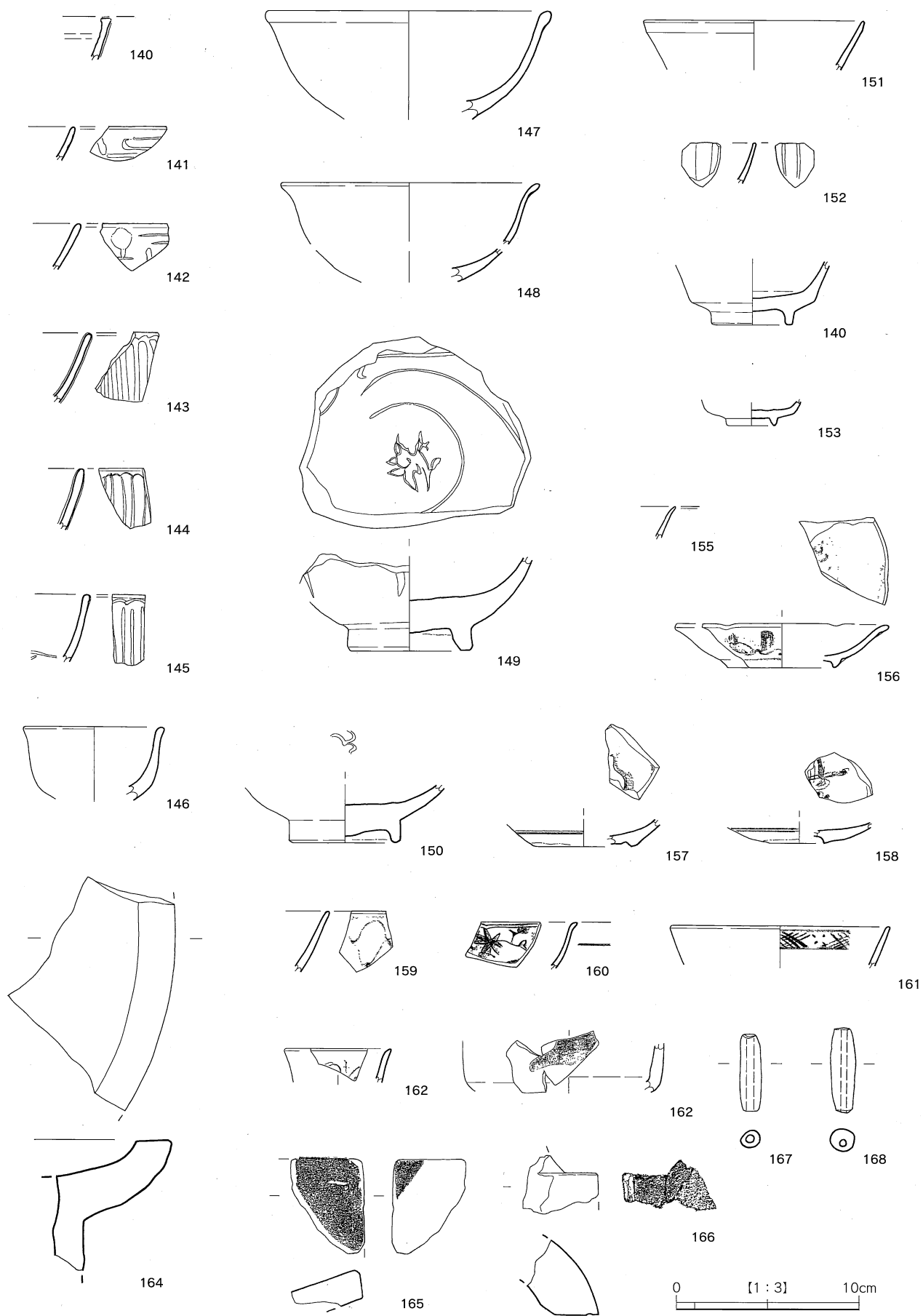


图28 IIa層他 出土遺物

表4 遺物観察表(4)

図	番号	種別	器種	出土位置	層	法	量(cm)	胎土色調	残存率	備考
15	54	土師器	杯	1号建物	-		底6.3	浅黄	1/5	底面へラ切り(以下、特記するもの以外は全てへラ切り)
	55	"	小皿	1号建物	-		底6.4	淡黄	1/8	
	56	青磁	碗	3号土坑	-		底5.8	灰	1/1	
	57	土師器	杯	2号土坑	-		底7.1	明黄褐	1/1	
	58	"	"	"	-		底7.4	浅黄	1/4	
	59	"	小皿	"	-		底6.0	にぶい黄	1/4	
	60	"	小皿か	"	-		底6.3	浅黄	1/2	
	61	土師質	火鉢か	"	-			橙	-	胎土中に繊維質の混入物
18	62	土師器	小皿	3号建物	-		底6.9	橙	1/5	
	63	土師器	皿	"	-		底7.6	にぶい黄橙	1/8	
	64	陶器	甕	"	-		底18.1	褐灰	1/8	
	65	土師器	杯か皿	5号土坑	-			にぶい黄橙	-	
	66	青磁	碗	"	-			灰白	-	
	24	74	土師器	杯か皿	1号溝	-			明黄褐	-
75		"	小皿か	"	-			明黄褐	-	
76		"	小皿	"	-		底5.9	にぶい橙	1/4	
77		"	小皿	"	-		底6.5	橙	1/4	内面に段状稜線あり
78		"	杯	"	-		底6.9	橙	1/3	
79		青磁	碗	"	-			灰白	-	蓮弁文
26		81	土師器	杯	1号小穴	-		底8.0	明黄褐	1/3
	82	"	杯	7号小穴	-		底6.1	にぶい黄橙	1/1	
	83	"	杯	15号小穴	-		底6.0	橙	1/3	
	84	陶器	擂鉢	29号小穴	-		口23.4, 底11.0, 高12.6	褐灰	1/6	
	85	土師器	杯	B-1	II c		口11.6, 底7.0, 高2.0	にぶい橙	1/4	
	86	"	"	A-2	"		底7.2	橙	1/5	
	87	"	"	"	"		底7.2	にぶい橙	1/3	
	88	"	"	A-2	"		底6.6	橙	1/3	
	89	"	杯か小皿	B-1	"		底6.1	橙	1/4	
	90	"	"	A-2	"		底6.9	にぶい黄橙	1/4	
	91	"	"	"	"		底5.7	明黄褐	1/4	
	92	"	小杯	"	"		底5.9	にぶい黄橙	1/4	
	93	"	杯	"	"		底7.2	にぶい橙	1/3	
	94	"	"	"	"		底7.5	にぶい黄橙	1/4	
	95	"	"	"	"		底7.4	にぶい黄橙	1/4	
	96	"	"	"	"		底8.2	にぶい黄橙	1/3	
	97	"	皿	"	"		底7.6	明黄褐	1/3	
	98	土師質	鍋	"	"			にぶい黄橙	-	外面煤付着
	99	陶器	擂鉢	"	"			褐灰・黄灰	-	胎土中白色粒混入
	100	"	"	"	"		底9.0	"	1/6	"
101	青磁	碗	"	"		口16.1	褐灰	1/8	発色不良	
102	"	"	"	II c II a		口15.5, 底(5.4)	灰	1/2	見込みスタンプ文	
103	"	"	"	II c			灰白	-		
104	白磁	皿	"	"			灰白	-		
105	青磁	"	"	"		口13.5, 底8.0, 高3.2	灰	1/2	厚く施釉され、外器面に気泡や凸凹がみられる	

表5 遺物観察表(5)

図	番号	種別	器種	出土位置	層	法	量(cm)	胎土色調	残存率	備考
25	106	土師器	小皿	B-1, 段状	-	底	5.7	にぶい黄橙	1/4	
	107	"	"	"	-	底	6.2	にぶい黄橙	1/2	
	108	"	杯	B-C-1, 段状	-	底	6.6	明黄褐	1/1	
	109	"	"	C-1, 段状	-	底	7.3	明黄褐	1/4	
	110	"	"	"	-	底	7.5	にぶい黄橙	1/4	
	111	"	"	"	-	底	7.0	橙	1/2	底面板目痕あり
	112	"	杯か	"	-	底	6.8	橙	1/4	
	113	"	小皿	"	-			にぶい橙	-	底面糸切り
	114	"	小皿か	"	-	-		にぶい黄橙	1/5	底面糸切り, 胎土中赤褐色粒
	115	青磁	碗	B-1, 段状	-	-		灰	-	
	116	"	皿	"	-	-		灰	-	稜花皿, 貫入
	117	"	"	"	-	-		にぶい褐	-	貫入, 発色不良
	118	"	"	"	-	口	12.0	灰白	1/4	稜花皿
	119	染付	碗	C-1, 段状	-	-		白	-	
	120	陶器	皿	B-1, 段状	-	-		灰白	-	釉調は黄緑色
	121	"	碗	"	-	底	3.7	灰白	1/4	釉調は緑, 深緑色
	122	"	大甕	"	-	底	33.8	褐灰	1/4	赤褐色, 内面に刷毛目状痕
	123	土師器	杯	B-2	II a	-		明黄褐	-	
	124	"	杯か小皿	A-2	I b	-		にぶい黄橙	-	
	125	"	小皿	C-2	II a	底	6.0	明黄橙	1/5	
	126	"	杯	B-2	"	底	6.1	明黄橙	1/4	赤褐色粒混入
	127	"	"	"	"	底	7.1	にぶい黄橙	1/3	外面に段状稜線
	128	"	"	A-2	I b	底	7.6	にぶい黄橙	1/5	
	129	"	"	B-2	II a	底	7.4	にぶい橙	1/3	
	130	"	小皿	A-2	"	底	6.0	橙	1/5	
131	"	"	"	I b	底	6.4	にぶい黄橙	1/4		
132	"	杯	A-2	II a	底	7.1	にぶい黄橙	1/4		
133	"	"	B-2	"	底	7.2	にぶい橙	1/6		
134	"	"	A-2	"	底	7.6	にぶい黄橙	1/4		
135	"	皿	"	"	底	9.0	明黄褐	1/2		
136	"	小皿か	B-2	"	-		浅黄橙	-	底面糸切り	
137	須恵質	鉢	C-3	I b	-		灰オリーブ	-		
138	土師器	粗製鉢か	B-4	"	-		橙	-	脆い, 砂粒多く含む	
139	陶器	甕	B-2	II a	-		灰オリーブ	-		
28	140	陶器	香炉か	C-3	I a	-		浅黄	-	黒色釉
	141	青磁	碗	A-2	II a	-		灰白	-	雷文帯
	142	"	"	B-2	"	-		灰白	-	雷文帯, 外面に凹部あり
	143	"	"	B-4	I a	-		灰白	-	蓮弁文
	144	"	"	B-2	II a	-		灰白	-	蓮弁文, 79と同一個体である可能性も
	145	"	"	A-2	"	-		灰白	-	蓮弁文
	146	"	小碗	B-2	"	口	7.8	灰白	1/4	
	147	"	碗	"	"	口	15.5	灰	1/4	貫入, 発色悪く黒ずむ
	148	"	"	A-2	"	口	14.2	灰	1/6	
	149	"	"	C-1	"	底	6.8	灰白	1/1	貫入, 見込みにスタンプ文, 高台内輪状に釉剥ぎ
	150	"	"	B-2	"	底	6.1	灰白	1/1	黄色味を帯びる。スタンプ文字不明瞭

表6 遺物観察表(6)

図	番号	種別	器種	出土位置	層	法	量(cm)	胎土色調	残存率	備考
28	151	白磁	碗	A-2	II a	口12.0		白に近い	1/6	
	152	"	皿	C-2	I b	-		灰白	-	菊花皿
	153	"	杯	C-3	II a	底4.5		灰白	1/2	
	154	"	小杯	A-2	I b	底2.6		灰白	1/2	蛇の目釉剥ぎ
	155	"	小杯か	C-2	II a	-		灰白	-	
	156	染付	皿	"	"	底5.9		白に近い	1/4	
	157	"	"	B-2	"	底5.2		浅黄	1/1	碁笥底
	158	"	"	C-3	I a	底2.8		灰白	1/4	碁笥底
	159	"	碗	C-2	II a	-		灰白	-	
	160	"	皿	B-2	"	-		灰白	-	
	161	"	碗	C-4	"	口11.9		灰白	1/5	
	162	"	小杯	C-3	"	口5.7		灰白	1/4	
	163	陶器	碗	C-2	"	-		灰オリーブ	1/5	

表7 出土銭貨一覧表

図	番号	出土遺構	出土位置	銭貨名	特徴, 初鑄年, その他
22	67	1号土壙墓	C地点, 4枚重ね①	「開元通寶」	唐/621年
		"	" 4枚重ね②	不明	鑄上がりが悪い
		"	" 4枚重ね③	"	鑄上がりが悪い
	68	"	" 4枚重ね④	「嘉祐元寶」	南宋/1056年
	69	"	" 2枚重ね①	「淳(熙)元寶」	南宋/1056年, 裏に「十」「二」の文字
		"	" 2枚重ね②	「(洪武通)寶」	鑄上がりが悪く文字不鮮明。すか入る。
	70	"	"	「○平元寶」	「治平元寶」(北宋/1064年か)
	71	"	A地点, 9枚(+α)①	「洪武通寶」	明/1368年, 完形, たわみ
		"	" 9枚(+α)②	"	完形, 文字は不鮮明
		"	" 9枚(+α)③	"	一部欠損
		"	" 9枚(+α)④	"	「通」の部分欠損
		"	" 9枚(+α)⑤	"	「武」の部分欠損
		"	" 9枚(+α)⑥	"	「通」と「武」の部分欠損
		"	" 9枚(+α)⑦	"	「通寶」は判別可能。「武」は欠損
	"	" 9枚(+α)⑧	"	きわめて遺存状況悪い	
	"	" 9枚(+α)⑨	"	きわめて遺存状況悪い	
* 上記のほか, 墓壙内A地点では, 細片化した銭貨が認められた。					
24	80	1号溝	埋土中	「朝鮮通寶」	李氏朝鮮/1423年
		4号小穴		無文銭か	
		14号小穴		無文銭か	
		16号小穴	底面近くから出土	「祥符○○」	「祥符通寶」もしくは「祥符元寶」か。(いずれも北宋/1009年)
		C-4, II a 層		「○元通寶」	

第Ⅲ章 まとめ

第1節 この章のはじめに

本章では、各時代・時期ごとに、まず出土遺物の時間軸上の位置付けや、遺物相互の同時性についての検討を行う。さらに、それを受けて各々の時代・時期に、本遺跡がどのような様相を呈していたのかという点について考察する。

なお、本遺跡の南側隣接地では、野首第1遺跡の発掘調査(主として丘陵端部＝県道関連調査¹⁾、斜面および谷部＝東九州自動車道関連調査²⁾が実施されている。現在整理中の資料もあり、制約もあるが、概要報告書に記された情報も加味しながら、河岸の低台地上に立地する本遺跡の性格について考えてみたい。

第2節 旧石器時代終末期 ～縄文時代草創期に関して

(1) 遺物 ～隆起線文土器～

草創期に属する土器が本来包含されていたと目される層はⅢ層最下部であるが、実際にその層位で出土した資料は5のみである。他はⅢ層以上の層に混入している状況であった。

これらの中で比較的類例を見出すことが容易な個体は、多条の突帯を密に貼り付け、矢羽根状の爪形圧痕を残す6である。九州南東部(現在の宮崎県から鹿児島県大隈半島地域)出土の資料では、宮崎市堂地西遺跡のⅡ-A類³⁾や国富町塚原遺跡の第Ⅰ類⁴⁾などと共通する特徴を有する(図29)。現在の編年観では爪形文土器に先行する位置付けが与えられている⁵⁾⁶⁾。

低平で幅が広めの突帯と、工具の刺突痕と目される爪形文を組み合わせる7は、爪形文土器への過渡的様相と考えられる。北方町蔵田遺跡出土資料⁷⁾や宮崎市椎屋形第1遺跡のⅤa類⁸⁾に似る。

斜めに垂下する突帯を有する5は、より古く遡る資料と考えられる。内湾する口縁部形態は、鹿屋市伊敷遺跡出土土器⁹⁾に似るが、違いも大きい。

連続しない突帯を付す1・2は、位置付けが難しい。不連続となる突帯は、泉福寺洞穴10層～8層

の資料中に類例を認めることができるが¹⁰⁾、突帯下の器壁面に爪形文が付される点が異なる。ここで隆起線文土器から爪形文土器、南九州貝殻文系土器に至る流れを、堂地西→椎屋形第1→砂田¹¹⁾、と遺跡単位で組列したとき、この1・2は組み込むべき適当な位置を見出せない。突帯の細さや間隔などがより古期の段階の属性、器壁面に付された爪形文が堂地西遺跡などでみられる隆起線文土器につながる属性と考え、ここでは6などの土器より時期的に遡る資料であるという見通しを示しておきたい。胴部以下が不明であることなど制約も大きい¹²⁾が、今後、詳細な型式組列の検討が必要となる。

このように未だ不明な点が多いが、少なくとも当該土器群の相互間には型式差が認められる。一定の時間幅を有する資料と位置付けられよう。

(2) 遺物 ～石器～

8の細石刃は、肉眼観察ではあるが桑ノ木津留産の黒曜石製とみられる。黒曜石利用に関する藤木聡の追究結果¹²⁾に合致する。

10はⅢ層最下部より単独で出土している。比較的小振り¹³⁾で、それゆえⅢ層準準期(縄文時代早期の押型文系土器期)に属する可能性も考慮しなくてはならないが、早期に下る槍先形尖頭器は細身・非対称形であり、安山岩ないしはサヌカイト製であることが多いということが松本茂による資料集成の結果、明らかとなっている¹³⁾。Ⅲ層最下部で出土しているという事実を重視したい。

(3) 同時性の検討

再度、関連する遺物と出土層について確認してみよう。Ⅲ層最下部より出土している遺物は、隆起線文土器(5)と細石刃(8)、槍先形尖頭器(10)の3点である。1や6など、その他の隆起線文土器は、上位のⅡ・Ⅲ層中より出土している。なお、Ⅲ層自体の層厚は20cm程度であり、Ⅲ層に包含される遺物の沈下・混入といった現象について完全に否定できるものではないが、Ⅲ層遺物の密度もさほど高くないことから、その確率は低いと考えられる。事実、Ⅲ層最下部で出土した押型文系土器は皆無である。また土色が異なることから、発掘調査時における出土層の判別も困難ではない。

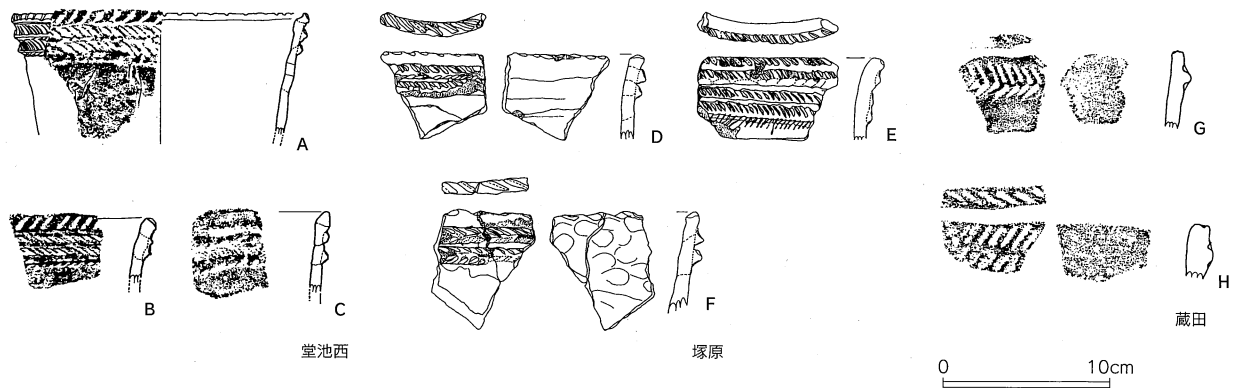


図29 九州南東部の縄文時代草創期土器 関連資料

ところで、「Ⅲ層最下部」と呼ぶ層は、暗褐色土(Ⅲ層)と褐色土(Ⅳ層)の層間に、ある幅をもって堆積している土壌のまとまりであり、色調は漸移的で一定とならない。埋没地表が現出したものでもごく短期間のうち堆積したと認定される層でもない。時間的な幅を有すると考えられ、そのことから上記3点の遺物が同一層準で出土したとしても、一括埋没遺物と認定することには無理がある。無論、該期に関しては弥生時代以後の遺構出土資料のような事例はごく稀であり、「共伴」の概念は当然違うが、そのことを考慮しても資料の同時性に言及することは躊躇せざるを得ない。

そのような限界があるため、Ⅲ層最下部出土遺物8と10については、出土隆起線文土器の存続幅の中に収まる資料との位置付けが穏当であろう。(1)の項で触れたように上限は定かでないが、下限は爪形文土器出現の直前と考えられる。

系譜の違う狩猟具の消長についての整理(南九州で卓越する石鏃の登場の時期も含めて)と土器出現時期の解明という大きな問題点が残っている。

(4) 遺跡 ～製作跡を伴わない「場」～

前述のとおり、Ⅲ層最下部の総出土点数は3点であり、分布密度は極めて低いといわざるを得ない。特に、剥片・碎片が全く出土していないことから判断するならば、少なくとも調査区内で石器が製作された可能性は皆無に等しい。8は使用後に遺棄されたか、あるいは搬入されたとみるべきか。

第3節 縄文時代早期に関して

(1) 遺物 ～押型文系土器～

土器は押型文系に属する一群が主体をなす。その中でも楕円押型文を施す個体が最も多い。南九州貝殻文系に属する土器はみられない。

外面に粗大な楕円押型文、口縁部内面に斜行沈線文を施す11は、九州北東部における編年の田村式(あるいは西日本一帯に広がる高山寺式)¹⁴⁾に相当する。16や19も同時期の所産であろう。一方、15、18は、より粒の細かい楕円押型文を施文する。焼成も11とは異なり、より堅緻である。28は類例の増加している「短枝回転文」¹⁵⁾を施す個体である。29は浅めの山形押型文を菱目状に施文するもので、手向山式など後出の様相を呈している。このように、該期の土器群については、複数の型式が存在することが確認できる。

一方、少量ながら無文の土器がⅢ層中より出土している。近年、押型文系土器と無文土器の共伴の有無に関する議論があるが、本遺跡の資料は、そこで対象となっている厚手・丸底のものとは異なり、薄手で平底となる。ここでは、同一層より出土した一事例として呈示しておく。いずれにせよ、当該土器は胎土中の混入物や焼成など、見かけの特徴が押型文系土器とは異なることから、仮に押型文系のいずれかの段階(様式=Style)に属するとしても、系譜を異にする一群であった可能性が大きい。

(2) 遺構・遺跡 ～集石遺構の展開～

Ⅲ層上～中位で集石遺構が5基検出されている。検出レベルがさほど違わないことから、ほぼ同一の時期に構築された遺構と考えたい。その場合、土器の出土量からみて11に代表される土器か、あるいは12や15などに代表される土器を使用した集団が構築に関わっていると推定しておく。

野首第1遺跡の県道関連調査箇所では、散礫(礫の広範囲にわたる散在箇所)4群、集石遺構51基が検出された。出土土器の所属型式は多様であるが、第I章でも触れた通り、主体となる時期は押型文系に属する田村式、手向山式期である。東九州自動車道関連調査箇所では、丘陵裾部で集石遺構が30基以上検出されている。その南西にある野首第2遺跡においても、多数の集石遺構が確認されており、礫の下部に深い土坑を有するものが認められた。南九州貝殻文系土器と押型文系土器の分布範囲が明確に分離できるという調査所見もある¹⁶⁾。

このように、同じ丘陵端部にある遺跡群で、多数の集石遺構が構築されている状況が捉えられており、土坑や配石の有無、規模などから分類し、それぞれの分布状況について検討していく作業や土器の分布状況との照合が必要と考えられる。ただし、その作業を行うためには、全ての関連遺跡の整理・報告が出揃う時を待たねばならない。

第4節 縄文時代前期に関して

(1) 遺物 ～前期の土器～

37～40は外・内面の条痕文と貼り付け突帯の特徴から、轟B式に比定される。

41は外反する列点文を施す曾畑式の口縁部であろう。胎土中に滑石は含まれない。44～47は不規則な並行沈線文のあり方からみて曾畑式の終末段階か、それに後続する型式に属する個体か¹⁷⁾。

42は貝殻によるとみられる押引状列点文・刺突文を施すもので、相美伊久雄の規定による深浦式系の日本山式に相当する¹⁸⁾。

43は胎土、焼成などの特徴が他と異なる。弧状の連続爪形文は、近畿・瀬戸内系の北白川下層I b式土器¹⁹⁾につながる特徴を有する。

(2) 遺跡 ～滅失した遺物包含層～

遺物包含層はみられないが、類例の少ない土器も出土しており、決して等閑視はできない。

まず、野首第1遺跡の県道関連調査箇所において轟B式や曾畑式、押引文を施す土器などが出土している点に注意したい。しかし、そのことをもって遺物が高位側から「流れ込んだ」と結論付けることは安直というべきであろう。摩滅した土器片はむしろ少ない。九州南東部においては、先に挙げた天神河内第1遺跡など河岸の低丘陵上に立地する縄文時代前期～中期の遺跡が知られている。本遺跡内でも、何らかの営みがあったものと考えたい。

第5節 中世に関して

(1) 遺物 ～土師器供膳具～

出土総数は多量に上るが、遺存状況は良くない。特に、器高が判らない個体が多いことから器種の判断は難しいが、大半は杯と小皿であると推定される。杯は体部がやや内湾する。底径は杯では7.5cm、小皿では6cm前後の値を示す個体が多い。

児湯郡内の当該資料については、底部のヘラ切り離しが根強く残ることから画期を捉え難く、良好な一括資料が少ないこともあいまって、変遷観が明瞭となっていない。そのため、本遺跡出土の資料に関して、そのみでの細かな検討は困難である。ここでは関連する資料を提示するにとどめる。

川南町銀座第1遺跡SD1²⁰⁾では、墓壙内より杯と小皿のセットが出土している。杯の内面には段状の稜が残る。器高は3.5cm。西都市寺崎遺跡の柵列97001付帯土坑²¹⁾では、IV期に比定される備前系の播鉢と、土師器杯が重なって出土している。土師器杯は体部が直線的に立ち上がり、やはり器高は3.5cm程度である。断片的資料であるが、それらは本遺跡の資料と近い関係にあると目される。一方、西都市岳惣寺遺跡14号出土の杯²²⁾は、器高がさらに低くなる。より後出の一群と考えられる²³⁾。

(2) 遺物 ～陶磁器～

年代比定の重要な拠りどころとなる資料がある。

II c層出土の備前系陶器の播鉢(99・100)はIV期後半に相当し、15世紀後葉の年代が与えられる²⁴⁾。

同じくII c層出土の青磁碗(101・102)は、上田秀夫分類のD-II類²⁵⁾に、端反りの白磁皿(105)は森田勉分類のE-2類²⁶⁾に相当する。それらの組み合わせから、II c層の形成期は15世紀後葉に比定できよう。なお、応仁・文明期を境に、都市や城館遺跡では、染付の出土量が急激に増加するという²⁷⁾。II c層遺物の中に染付を含まないという事象は、15世紀後葉でも比較的古い年代を示唆していると考えたいが、一方で地域差や遺跡の性格に起因する可能性も排除できない。

1号溝出土の青磁碗(79)の蓮弁文は、蓮弁の単位が崩れかけている。上田分類のB-IV'類に相当する。

II a層出土資料の中には、青磁碗・皿、白磁碗、染付碗・皿のほか、国産陶磁器などがあり、堆積状況を反映して、時間幅が認められる。簡便化された雷文帯を施す青磁碗の141・142は、上田分類のC-III類に、143~145はB-IV類に相当する。体部中位が屈曲する形態の高台付白磁碗(153)は15世紀後葉から16世紀前葉の特徴を示している。

29号小穴出土の焼締陶器(84)は、豊後府内における出土遺物の中に類似資料がある。16世紀後葉~17世紀前葉に中国南部で生産された製品である可能性が高いという²⁸⁾。

(3) 遺物 ~ 銭貨・茶臼 ~

1号土壙墓出土の銭貨は渡来銭で占められる。図21のAで出土した9枚(+ α)は全て「洪武通寶」である。ただし、その中には文字の不鮮明なものや鋳上がりの悪い個体がみられることから、おそらく模鑄銭を含むと考えられる。模鑄銭の悪銭が含まれる点は、都市部での撰銭慣行→地方への悪銭の流入という15世紀後葉以降の状況に符合する²⁹⁾。

また副葬された銭貨の枚数が16枚(+ α)と多いことは、地方にも六地藏信仰が広がり、埋納銭貨が6枚に収斂されていく室町時代後期以前の造墓であったことを裏付ける³⁰⁾。

II a層の出土であり、細かな所属時期は判らないが、茶臼(164)の出土も注目に値する。茶臼はほとんどの場合破碎された状態で出土するという検討結果がある³¹⁾。本例もやはり小破片化している。

(4) 遺構 ~ 15世紀後葉の遺構群を中心に ~

1号掘立柱建物と2号掘立柱建物は妻柱筋を揃える形となっており、さほど規格性は高くないが、南北方向に揃えた一定の主軸のもとに配置されている。2棟は同時期に存続した可能性が高いと推測される。II c層出土遺物から導き出される年代より、15世紀後葉に機能した施設と位置付けたい。いずれも建て替え痕跡がない点が注目される。1号・4号・5号柱穴列についても、ほぼ同一主軸をとることから、同時期の遺構と位置付けることに抵抗はない。3号掘立柱建物を含めれば、前章第7節で触れたように、「品」字形を描くように建物が配置され、柵ないしは扉で囲繞・区画された一面があったことになる。以下、これらをI期遺構群と称する。

1号土壙墓の年代比定は容易でないが、銭貨の枚数からみて室町時代後期を大きく下るものではないと判断される。調査区の南側では、旧県道敷設の際に石塔群が確認されている。I期遺構群の南に展開していた墓域内の最北端に位置した墓と考えたい。

一方、主軸が大きく傾く1号溝は、青磁碗(79)の年代観から15世紀末葉が上限となる。I期遺構群よりも後の遺構であることは確実であり、II期遺構と称することにする。このII期については、1号溝以外の様相が明らかでないが、主軸が西に偏するところから、2号・3号柱穴列や段状遺構がこの期に属する遺構の候補となろう。さらに野首第1遺跡県道関連調査で検出された掘立柱建物にも注目したい。この2棟の建物跡は南の丘陵上にあり、主軸が1号溝とほぼ同一方向となっている(図30)。

その他の遺構については、さらに状況がつかめないが、29号小穴の出土遺物から、近世まで何らかの営みがあったことがうかがえる。

(5) 遺跡 ~ 集落の性格 ~

上記のような本遺跡検出の遺構群の性格について、どう捉えればよいのであろうか。この点について、遺物の面から確たる裏付けを得ることはできないが、I期を中心に若干の推定を行う。

まず、遺跡の立地条件を確認するならば、河岸の低台地上に立地すること、南に古道が通っていたことが、重要な要素となる³²⁾。このことから「河津」

など、交通の要所に立地した集落であった可能性が浮上する。高知県の船戸遺跡は、中筋川沿いに立地する中世の河津の遺跡とされ、石製の碇が出土している³³⁾。また「戸」のつく地名は、「八戸(やと)」や「小戸」など宮崎県内でも河川との関連の深いところに散見される³⁴⁾。本遺跡の地名(「崩戸」)もその該当例の一つと考えられる。

ただし、本遺跡の場合、短期間で廃絶したことや建物の規模や密集度などから、都市の様相は見出せない。むしろ「市」的な様相を呈する場所であったと考えたい。市は物資を運搬する際の利便性が重視されるため、津や道路の近くに設けられる。また、「神」と「人」との接点と考えられていたことから、寺社の門前や墓所の近くにある事例が多い。その一方で、村落民にとっては商人など外部の人間との接点であり、実際の村落の境界近くに設定されることが望ましいとされる³⁵⁾。

本遺跡の場合、村落(生産者・消費者)との関係解明は今後の課題であるが³⁶⁾、交通の要所であり南に墓域が広がっていたらしい点など、近年明らかとなっている立地条件と整合する。おそらく『一遍聖絵』に描かれる市のような情景が展開していたのではなかろうか³⁷⁾。煮沸具の比率が極めて低いことや、掘立柱建物の柱筋が通らないことも理解が容易となる。そして、この地は「町」に発展することはなかった³⁸⁾。

II期については情報が少ないが、戦国期を控え、小丸川左岸の高城と対峙するという位置関係からして、防御のための何らかの施設が置かれたものと推定しておきたい。

なお、後の明治期には、この地に尋常小学校があったとされるが、今回の調査区内においては、近代以降に形成された層の堆積(I b・I c層)以外に、明瞭な痕跡は認められない。

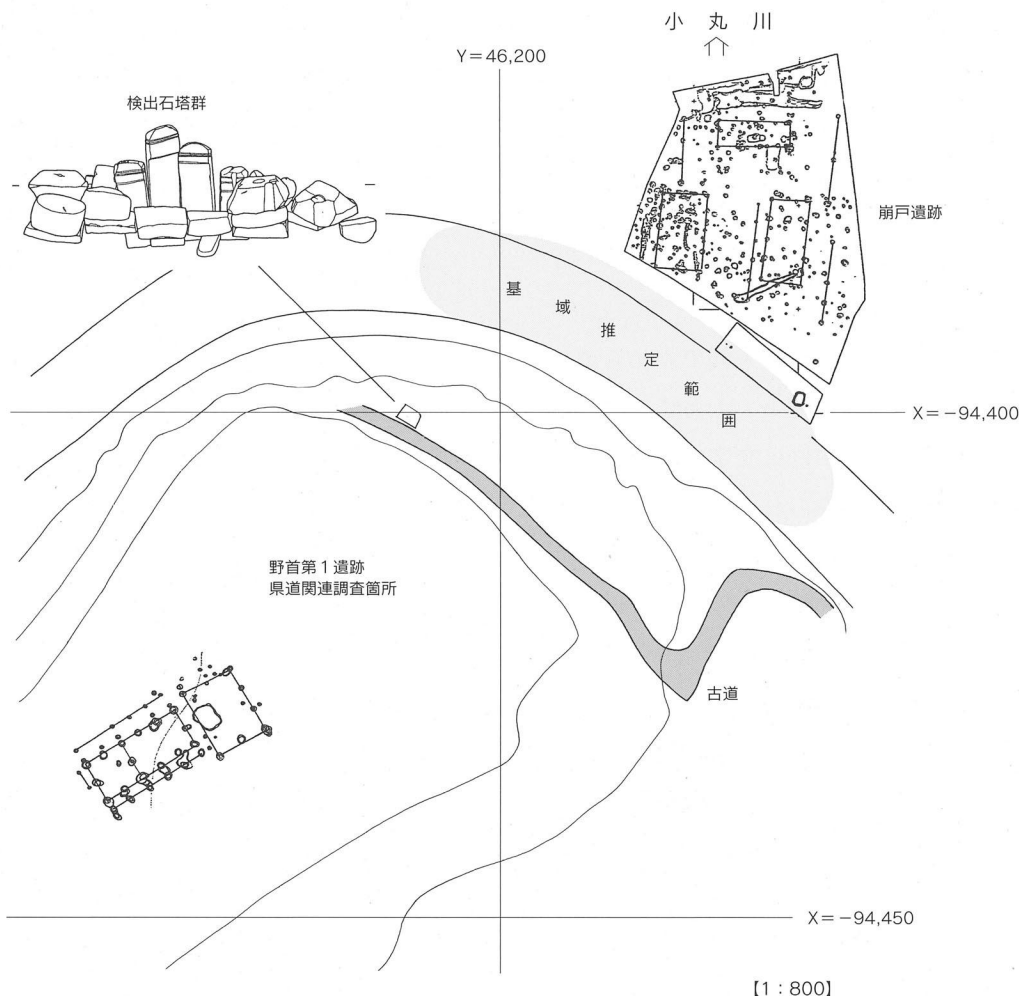


図30 野首第1遺跡検出遺構との関係(文献より作図)

註

- 1) 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『野首第1遺跡』
—宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書86—
*以下、県道関連調査の調査成果は、同書による。
- 2) 宮崎県埋蔵文化財センター 2003 『東九州自動車道
(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ』
—宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76—
- 3) 宮崎県教育委員会 1985 『宮崎学園都市発掘調査報
告書2 堂地西遺跡ほか』
*今回の検討における資料間の類似性の認定は、実測
図に表される属性についてのみを対象に行っている。
- 4) 宮崎県埋蔵文化財センター 2001 『松元遺跡・井手
口遺跡・塚原遺跡』—宮崎県埋蔵文化財センター発掘
調査報告書44—
- 5) 大塚達郎 1989 「草創期の土器」『縄文土器大観』
1 小学館
- 6) 村上 昇 2000 「九州地域に於ける縄文時代草創期
土器編年試論」『南九州縄文通信』14 南九州縄文研
究会
- 7) 宮崎県教育委員会 1995 『打扇遺跡・早日渡遺跡・
矢野原遺跡・蔵田遺跡』
- 8) 宮崎市教育委員会 1996 『椎屋形第1遺跡・椎屋形
第2遺跡・上の原遺跡』
- 9) 鹿児島県教育委員会 1983 『大隅地区埋蔵文化財分
布調査概報』—鹿児島県埋蔵文化財調査報告25
- 10) 麻生 優 1985 『泉福寺洞穴の発掘記録』築地書
館
- 11) 田野町教育委員会 1994 『八重地区遺跡』—田野町
文化財調査報告書19—
- 12) 藤木 聡 2002 「先史時代における黒曜石の利用
—黒曜石の消費地 宮崎—」『石器原産地研究会誌
Stone Sources』1 石器原産地研究会
- 13) 松本 茂 2003 「宮崎県における槍先形尖頭器の出
現と消滅」『九州旧石器』7 九州旧石器文化研究会
松本 茂 2003 「草創期～早期の石器研究における
諸問題 (I) —九州東南部の尖頭器を中心に—」『九州
縄文時代早期研究ノート』1 九州縄文時代早期研究
会
*なお、上記文献中で「青木」遺跡とあるのは、本遺
跡のことである。

- 14) 坂本嘉弘 1995 「西日本の押型文土器の展開 —
九州からの視点—」『古文化談叢』35 九州古文化研
究会
- 15) 柳田裕三 2003 「通称 ‘イチゴ’ という名の押型文
土器」『利根川』24・25 利根川同人会
- 16) 前掲2に同じ
- 17) 桑畑光博 1987 「南九州における曾畑式系土器の動
態とその背景」『鹿大考古』6 鹿児島大学法文学部考
古学研究室
- 18) 相美伊久雄 2000 「深浦式系土器の再検討」『人類
史研究』12 人類史研究会
- 19) 網谷克彦 1981 「北白川下層式土器」『縄文文化の
研究』3 雄山閣
- 20) 前掲2に同じ
- 21) 宮崎県教育委員会 2001 『寺崎遺跡』
- 22) 西都市教育委員会 1994 『岳怒寺遺跡』—西都市埋
蔵文化財調査報告書6—
- 23) 岡本武憲 1995 「九州南部」『概説中世の土器・陶
磁器』真陽社
- 24) 間壁忠彦 2001 『備前焼』—考古学ライブラリー
60 ニューサイエンス社
- 25) 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」
『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 26) 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」
『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 27) 續伸一郎 1995 「中世後期の貿易陶磁器」『概説中
世の土器・陶磁器』真陽社
- 28) 吉田 寛 2003 「中世大友府内町遺跡出土の産地不
明焼締陶器について」『貿易陶磁研究』23
日本貿易陶磁研究会
- 29) 小畑弘己 2002 「九州・沖縄地方」『季刊考古学』
78 雄山閣
- 30) 藤澤典彦 2002 「墓中埋納銭貨の変容—六道銭の変
容をめぐって」(同上)
- 31) 堀田孝博 1998 「第5節 神奈川県下出土茶臼につ
いて」『下鶴間城山』—大和市文化財調査報告書66
大和市教育委員会
- 32) 近世に成立した絵図『高城陣構図』(高鍋町日南市
所蔵)には、本遺跡付近を通る古道が描かれている。(『宮
崎県史』通史編 中世に所収。)

33) 松田直則 1996 「四万十川流域の中世河津」『津・泊・宿—中世都市研究3』 中世都市研究会編 新人物往来社

高知県埋蔵文化財センター 1996 『船戸遺跡』 — 高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書27

* 松田氏は船戸遺跡について「川船の停泊地の役割の中で簡単な市的性格も持ち合わせているのではないかと推定している。

34) 福田泰典氏の見解による。

35) 笹本正治 1994 「市・宿・町」『岩波講座日本通史』 岩波書店

36) 本遺跡の南東には山王集落があり、山王古墳群が点在している。推測ではあるが、古墳時代後期から古代にかけて、小丸川下流西部の重要な集落が立地していた可能性を指摘しておきたい。

37) 岡本佳典 1992 「中世の市場風景—絵巻物にみる市場」『季刊考古学』39 雄山閣

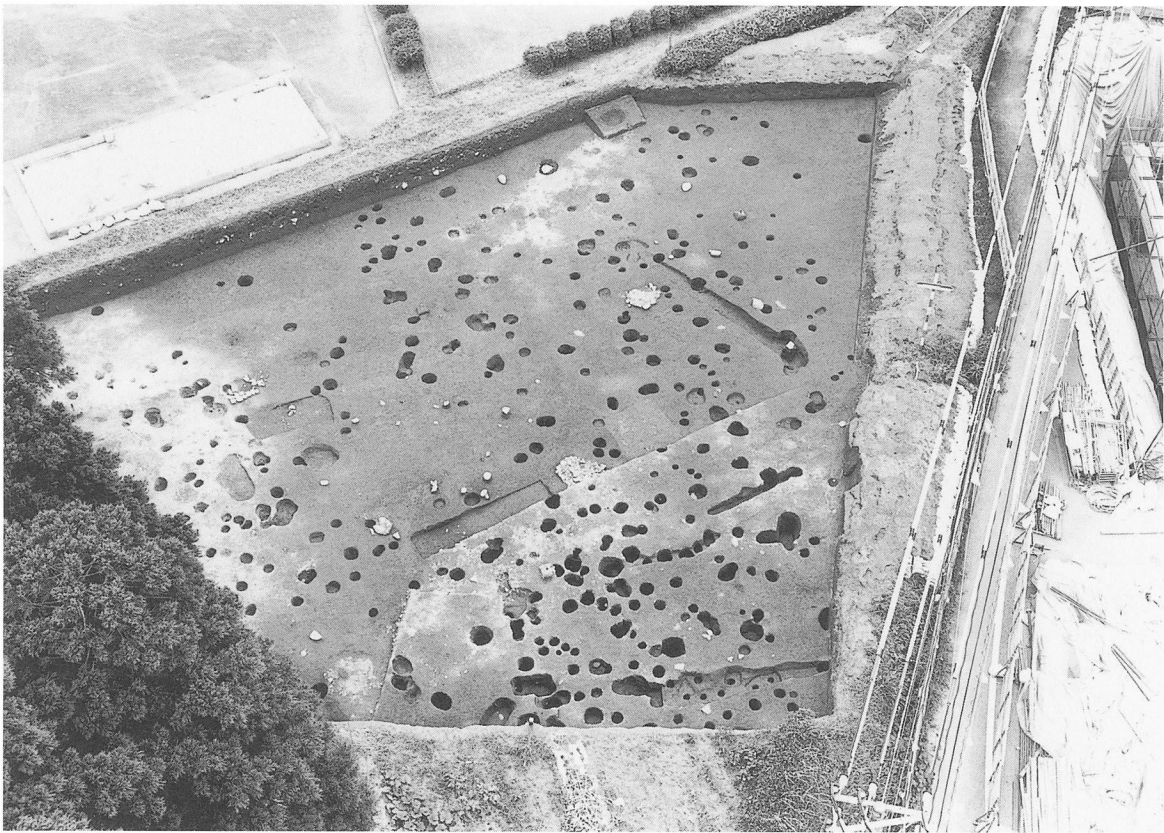
38) 前掲36によれば、市は必ずしも町に発展するとは限らない。

* なお、上流の木城町高城では短冊形地割が存在することから城下集落が成立していたと考えられている(図1の地図中に「町」の表記がある)。あるいは「市町」の性格を帯びていたのかも知れない。

ちなみに、町・都市の成立に関する議論は、日向においては低調であると言える。西都市の寺崎遺跡において古代官衙衰退後に、密度の高い中世の遺跡が展開していた可能性が指摘されたことや、高城や西都市都於郡に短冊形地割あることが知られている程度で、具体的様相は明らかになっていない。



崩戸遺跡全景



中世遺構完掘状況



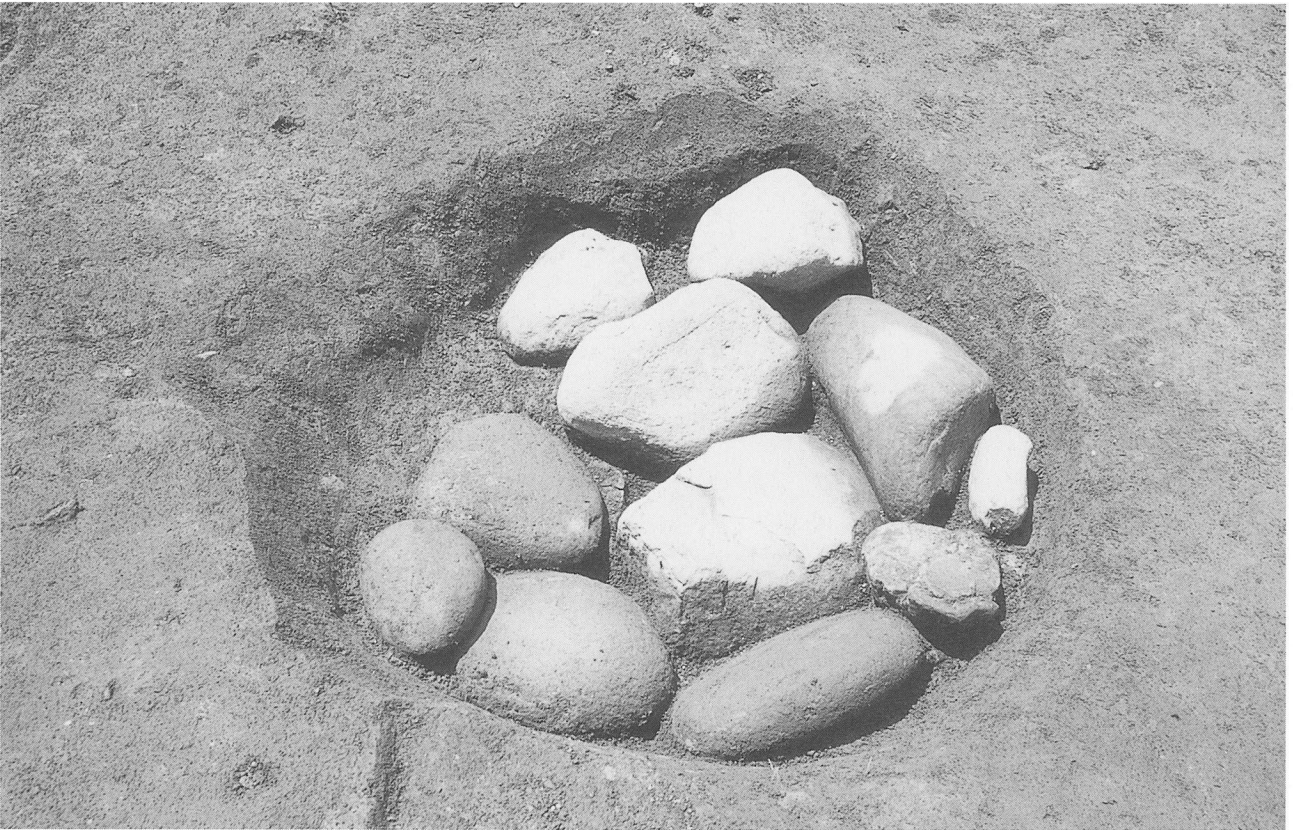
確認調査トレンチにおける層序



縄文時代早期包含層(Ⅲ層)掘り下げ後の状況【南東より】



1号集石(上部礫)【北より】



1号集石(配石・土坑)【北より】



3号集石(上部礫)【北西より】



3号集石(配石・土坑)【北西より】



2号集石【西より】



4号集石【西より】



5号集石【北西より】



1号掘立柱建物周辺【北より】



段状遺構【西より】



段状遺構【南東より】



段状遺構(北西端部)【南東より】



2号柱穴列 柱穴の柱痕跡【南西より】



1号溝【南西より】



1号土壇墓 検出状況【北より】